

佐藤政府を倒せ！  
武装闘争と大衆路線を結合・  
発展させよ！

—ニクソン訪中・世界革命闘争の

新局面とわれわれの任務—

一九七一年九月

佐  
野  
茂  
樹

いつでもこういうふうだった。敵はやっつけられ  
ると、和解をはじめるのである。われわれはヨー  
ロッパの帝国主義者諸氏にむかって、われわれは講和  
に同意すると、いくどもくりかえして言ってきた。だ  
が、彼らはロシアを隷属させようと夢想してきたので  
ある。だが、彼らの夢想は実現されない運命にあるこ  
とを、いま彼らは理解したのである。

(レーニン「全集」第三〇巻、一三五頁)

目次	
△はじめに▽	1
I ニクソン訪中と世界革命闘争の新しい局面	3
II 米帝を追撃し日帝と対決せよ	18
III 佐藤政府を倒せ	32
IV 武装闘争と大衆路線を結合・発展させよ	39

## △はじめに▽

### 最近の日本における武装闘争と世界革命闘争

三里塚・七月闘争をはきんで、六・一七東京、七・一〇三里塚、八・七東京、八・九成田と連続した爆弾闘争は、明白に日本における革命闘争再建の標識である。それは未だ姿なき兵士に荷われているとはいえず、背後に広大な人民大衆の闘争意志に支えられ、かつそれを組織・領導しつつ、政治闘争の核心的な攻撃対象につきささっている。むろんそれは未だ極めて小さい。だが、これら小さな「試行」のなかに、巨万の武装蜂起が胚胎している。それを無視して爆弾闘争を政策的に「評価」するものは、己れの恥を知るべきである。

なによりも、一連の爆弾闘争は、それぞれ革命的無私、「破私立公」の精神で貫ぬかれている。武装闘争について、まるで自分こそがやっているかのように大言壮語するが全くなにごとも着手しえないような諸党派の後衛性とは革命的資質においてちがうのだ。そして、武装闘争を大衆闘争の尖端にたたせ、その高度化と圧倒的な進路をきりひらくこと、かつ人民大衆の様々な戦線でのものもろもの闘争形態をもつてするたちあがりといいたづさえて武装闘争を堅持すること―この目的意識的な実践構造への接近が最近の経緯である。このことは洞察力をもった人民には一目瞭然である。革命の健康な力はばつ興している。

私は一貫して大衆闘争から召還した武装闘争に反対し、かつ武装闘争を回避して大衆闘争に局限することに反対してきた。この二つの傾向とともに、本来階級社会数千年の歴史を一掃するプロタリア革命の根底的な暴力性から身を遠去ける思想的墮落である。また、武装蜂起が前衛の媒介をもった巨万のプロタリア人民大衆の英雄主義の発揮としてしか成立たないことに無理解であり、一方はエリート主義の、他方は日和見主義の、共通した反人民的大衆警視である。世界的権力都市におけるわれわれの武装蜂起への過渡としての武装闘争は、一貫して人民の海と不即不離の交互媒介をもって持続する。そして最下層の人民を核心とする人民大衆の武装蜂起を、思想的政治的にも軍事的組織的にも一つの時代の巨大なカオスを通つての経緯の結晶として用意する。前衛たるものはこのような実践構造を現在の運動に体现し、帰結にまでおしすすめることを任務とする。われわれの人民の海は人民一般として潜在するのではなく、各戦線に組織された大衆闘争の一貫した堅持とその基盤をはじ

め人民の革命意志、知恵、物質力の総結集である。それを組織し、それに依拠することは前衛の固有の任務の一つなのであり、武装闘争を指導する前衛の任務の不可欠の一面である。

七一年夏の経緯は断乎堅持・発展させられるべきである。発展の構造は以上のことから明らかである。武装闘争に賛成か反対かは革命派と日和見主義との一つの分岐点である。革命は臆病を憎む。だがそれ以上に武装闘争を実際にやるかどうか分岐点である。革命は口舌の徒を嫌悪する。そして、どのようにやるかはいま一つの分岐点である。革命は政治的盲目を悲しむ。体的な状況にきりこむ武装闘争が必要である。革命は抽象性を拒絶する。

秋以降への進展を、われわれは、国際情勢の新たな展開をさぐりつつ目指すべきである。なぜなら、世界の闘争は日本階級闘争に规定的に作用するからであり、とりわけ最近の事態は国際的に日本階級闘争を焦点とする局面の到来を告げしらせており、われわれは日帝との死闘に心臓部に勝ちぬく一歩を進めねばならないからである。

ヴェトナム革命戦争の明白な軍事的政治的勝利の趨勢、これに立脚した中国革命外交の推進（ニクソン訪中の誘いこみ）

は、国際情勢の根本的变化の前徴である。それは、世界革命の前進によってもたらされた明白な前徴である。

われわれは様々のブルジョアの反動的見地と闘って、これらを世界革命にむかう世界的規模の階級闘争の生きた現象としてとらえねばならない。革命的労働者国家の堅持、後進国革命戦争の前進、帝国主義国革命戦争の再建、これらの複合的発展こそが、今日、帝国主義の侵略・反革命を破綻・動揺・大再編につきおとしているものである。そして今日のこれら世界の革命闘争を主導してきたのは革命的労働者国家、後進国革命戦争、その永続世界革命への推力である。それらは最前線となって帝国主義心臓部に本格的な革命闘争の再建を闘いつつきた。このような現段階、一九三〇年代の大敗北以来の帝国主義心臓部のプロレタリア革命闘争の決定的登場への過渡性こそ、今日の特徴である。だがその前進は過渡的ではあっても、窮極的決着を直接におしあげている過渡性である。

闘いとられつつある地平は直接にはアメリカ帝国主義の侵略・反革命に対する革命的破壊である。同時に帝国主義総体の侵略と反革命再編の動揺と困難である。だからとりわけ日帝に矛盾が集中しつつある。日本帝国主義を敗北させ、多くの斜陽帝国主義国を一掃してきた後進国革命戦争・革命的労働者国家が自己の前にたちふさがったアメリカ帝国主義を打破するという四半世紀間こえることのできなかった限界を革命の内包的かつ外延的永続性によって確実に突破しつつあることの世界史的位置をしっかりとつかまねばならない。それは帝国主義世界支配秩序の破綻・対外危機を帝国主義打倒に永続する局面の到来

である。主戦場を帝国主義国内にきりひらき、主力を帝国主義国プロレタリア人民とする世界革命闘争の新たな発展段階への移行である。

それは文字通り帝国主義心臓部での死闘である。なぜなら帝国主義が後退の中に陰謀をめぐらし、新しい侵略・反革命の旗頭をおしたるばかりでなく、自己の没落と闘う対外危機克服の反革命国家構築に必死の活路を見出すからである。反革命は密集する。

われわれは、米帝体制の崩壊を最も徹底してヴェトナム革命戦争の勝利、中国革命の決着として追撃すべきであり、そこから運動する日「韓」台連命共同体の困難をついて日帝侵略・反革命を危機にたたきこみ、日帝打倒の現実的進路をきりひらかねばならない。当面、世界人民の闘いといった有利な情勢に依拠し、佐藤自民党政府の反革命的的地位をますますとろなく暴露し、沖繩「返還」協定批准阻止・三里塚決戦をバネに佐藤政府を打倒することが中心任務である。

世界人民は佐藤政府打倒に強力な支援を送っている。佐藤打倒は巷の声である。われわれは議会的的発展はもちろんブルジョア内部の葛藤をも利用し、プロレタリア革命派の独自のやり方で佐藤政府打倒に異常な執念をもつべきである。出来るだけ人民のヘゲモニーが関与して可能な限りの無惨な末路を用意すること、これが日帝の侵略・反革命に打撃を与え、敵の予備の後方を引きつり出し、人民に持続して誰と闘い誰を倒すかを鮮明にする突破口であり、この人民自身の政治的実生活の高度化の経緯の中でこそ共産主義と人民の戦列を確固たるものにする事ができる。われわれは日帝打倒・臨時革命政府へのこく端緒的な第一歩を武装闘争・大衆路線の結合・発展によって佐藤政府を倒すことからきりひらき、蜂起の完形成と人民の結合を飛躍させねばならない。

## I ニクソン訪中と世界革命闘争の新しい局面

### 〈世界プロレタリア人民の闘いによる米帝反革命の破綻と後退〉

① ニクソン訪中決定は、帝国主義と革命的労働者国家・後進国革命戦争・帝国主義人民との数十年にわたる世界的規模の階級的民族的拮抗関係が総体として後者の有利に転じた一帰結である。アメリカ帝国主義の侵略・反革命と帝国主義世界支配

秩序の、ことにアジアにおける破綻の表現である。この破綻は、国内統合を根底的に再建することから出直す戦略の後退に結びついた。しかし、再編・再進出の野望を秘めた、考えられうるかぎりでもっとも大きな後退も、米帝の今後の有効な展望を保証するものではない。とくに、米帝の戦略の後退を同時に帝國主義世界支配秩序の維持・再編とすることで不可欠の日本帝國主義のアジア侵略・反革命に著るしい困難を集中しつつある。革命的労働者国家、後進国革命戦争を主力とする世界プロレタリア人民の闘いは、帝國主義の侵略・反革命の過去と現在に對してばかりでなく、現在の進行する未來に對しても、永続的な困難を闊いとらいつつある。この困難を深め・広げ、帝國主義打倒そのものを世界革命の直接の實踐課題として再登場せしめること、これが今日までの世界プロレタリア人民の闘いがきりひらいた地平である。帝國主義国プロレタリア人民が、革命的労働者国家や後進国革命戦争が自己の固有の高度化への飛躍を自分自身に問うている。帝國主義国プロレタリア人民が、革命的労働者国家や後進国革命戦争が自己の固有の世界革命任務を全うしてきているのと同様に、自己の固有の世界革命任務―帝國主義打倒を心臓部で實現することを、革命的労働者国家・後進国革命戦争がきりひらいた状況に依拠し、継承・発展させる能力をもって実践化することこそ肝要である。いわば、世界の農村は世界的都市に還流し、獨特の革命法則性に立脚して、世界的都市自体の革命的解体をつつある。眼目はこの逆包圍を世界的都市に還流し、獨特の革命法則性に立脚して、世界的都市自体の革命的解体を内部から須上にのぼせることなのである。

### △ヴェトナムの永続革命戦争・その世界史的位位置▽

② 米帝の後退・屈服・再編を余儀なくした現在の直接の主力は、ヴェトナム革命戦争であり、米帝とかいらい政府のとどまることのない敗勢であり、世界に冠たる米帝軍の様々の形で進む内部解体である。

ヴェトナムの事態はプロレタリア人民の側からみれば、ヴェトナム一國革命が国内旧支配階級を打倒し日帝を駆逐し仏帝植民地支配を打倒して進撃したことに介在してきたアリカ帝國主義―密集する國際反革命との対決に発展した永続革命戦争である。米帝が最大最強の帝國主義世界権力であり、米帝を基軸に帝國主義世界支配秩序を構成してきたのであるから、異常な困難をついての永続革命戦争の勝利的方向のかくとは、語の正確な意味で、世界革命の最前線にない、全領域に帝國主義の動搖をもちこむものであった。植民地革命が比較的小さな「二・三流」帝國主義本國に革命的危機を招来するという、それ自体世界革命の有力な前進の枠をはるかにこえる世界史的位位置をもつ。一方では徹底したプロレタリア・ヘゲモニーの確立と結び

ついた社会主義への革命の永続的深化、他方では敗戦帝國主義・日帝や「二流」帝國主義・仏帝を蹴散らして米帝との一〇年をこえる直接の争闘における勝利、反帝世界革命への永続的拡大。ヴェトナム人民は自己の革命のもっとも徹底した勝利を追求し戦うことによって、たんに直接に自己にかかわる米帝反革命を苦境のどん底にたたきこんだだけではない。米帝を打倒する、アメリカ革命を實現することはできないけれども、米帝反革命―革命封じこめの二〇年来の基調を粉砕し、大後退・大再編の必要をもたらすことによって世界的規模で革命の客観的状況をおしすすめた。アメリカ人民の革命的再建を急速にうながし全世界人民に勝利の確信を鼓舞することによって世界革命の主體的成熟にはかりしれない貢献をなしつつづけているのである。この点にこそ、かつて中国革命戦争、朝鮮解放戦争が世界プロレタリア人民の力量に規定されて、なわ、この二〇年以上にもわたって米帝の革命封じこめと反革命鉄環の形成とに對峙・拮抗する状態を経過せざるをえず、世界反革命の牙城たる米帝国内革命戦争との結びつきを組織するのになお長期にわたってもちこたえてゆかばならなかつたあの一九四〇年代末―五〇年代中葉の地平をこえる内実なのである。

いまや米帝のヴェトナム反革命の軍事的「前進」は全く不可能である。むしろ、ヴェトナム政策そのものに関して、いかにして米帝および帝國主義の地歩を残して、それへの手がかりを残して「転換」するかの陰謀はいっそう必死になって摸索されている。(それが、どのようなものかは後述する)。しかし明らかなのは、ヴェトナム革命の世界的地位からして米帝の破綻しおこされたヴェトナム戦略の個々の手なおしではどうしようもなく、ヴェトナム反革命の世界的地位からして米帝の世界とくにアジア戦略の基本的な「修正」による後退―再編にまでおいこめられたことである。これが橋のもう一つの側面である。米帝が中国革命の成立以来一貫して革命中国の墮落と変質を強要し、朝鮮・ヴェトナムを反革命的に分断し、アジアの革命的崩壊を防ぐべく政治的軍事的に展開したダレス以来の國際反革命の形態が根本的に転換することなしにはやっていけないのである。いままでのやり方でやっていけないとなった、ヴェトナムの破産が基本戦略の破産に結びついた。これは米帝がはじめに縫着した対外危機であり、それは帝國主義總体の対外危機へと連動する。

ニクソン訪中のねらいは、いままで通りのやり方で世界支配をやっていけなくなった米帝が国内統合再建を含めて別の世界支配のやり方を確立するべく、息つきを求めたことである。ソ連を墮落と変質への道に導き帝國主義世界支配の枠組みとなしえた米ソ平和共存型の米中平和共存を夢見ること、新たに「米中ソ三極均衡」を作ること、その中で帝國主義の優位も自國の覇権的地位も再建すること、中国を「宥和」し民族解放社会主義革命の不徹底性を取り引きすること、そして対外危機回避のポーズの中で国内統合再建の手がかりを得、国内革命闘争圧殺をからとること、新たな陰謀とともに目論まれることは以上

の諸点であろう。それゆえ、根本的な転換といっても、米帝が打倒されたわけでもなく、帝国主義が去勢されたわけでもなく、いかなる意味でも反革命世界戦略が放棄されたものでもない。にもかかわらずこれが根本的転換であるのは、革命の攻勢によって今までの支配のあり方を変えざるえないまでに追いこめられたものだからであり、しかもそこまでしても安定が確保され再建が展望される保証は何一つ物質化されえず、かえって対ヴェトナム・インドシナ反革命、日米共同声明路線は深刻な危機をあらわし始めているからである。息つきが新たな陰謀をもって可能となるのは、帝国主義諸国の革命闘争が有効に今日の帝国主義危機をとらえず、帝国主義権力のふりまく幻想にのみこまれて解体され、暴力的攻撃に甘んじて粉砕される場合だけである。あらゆる徴候からみて、革命的労働者国家や後進国革命闘争が一転して帝国主義との宥和に走り、世界革命への今後の貢献を衰えり、そうすることによって積年の自己解放の苦闘を更切ることがありえない。彼らの闘いによってこそ、危機はより心臓部におしやられ、革命の主力が心臓部において求められ、のみならず組織されてきているのである。このようにとらえずに、帝国主義強国を打倒するのに帝国主義国プロレタリアートの決定的行為がなければならぬことを都合よく棚上げして帝国主義を打倒しつくしえない後進国革命闘争の「限界」や革命的労働者国家の「裏切り」を云々することは極端な誤りである。それはあわてふためいて「米中接近」「米中和解」「米中共存」をわめきたてたあたかもそれが世界革命の大方向に与ってかわるかにように幻想をおおいたるブルジョア・デマゴグや小ブル・イデオロギーの没階級の見地にもとづく右翼日和見主義の裏がえし、「似而非左翼」日和見主義なのである。

### △ヴェトナム人民の軍事的政治的勝利▽

③ ヴェトナムに関する動向をもう少しみておこう。

ヴェトナム政策転換の最初の大きなエポックは、六八・三・三一ジョンソン「和平」提案である。以来三年四カ月余を経て、結局はニクソン訪中の大バクチに行きついた。しかし、それが米帝に名譽ある撤退を何ら保証しそまないことはニクソン訪中に関するヴェトナム民主共和国及び解放戦線の態度、それに関連する中国の声明で明らかである。

ジョンソン提案以後、直接にヴェトナム革命は軍事的戦場を継続しつつ、一方で政治的戦場をもつに至った。この政治的バリ会談は軍事から生まれたのであり、軍事の延長である。ヴェトナム人民は六八年のサイゴン・テト攻勢に象徴される大反攻によってマクナマラ戦略の限界を実践的に明証して、旧来のやり方のままで米帝軍大量投入の持続によるヴェトナム革命の軍事的粉砕を断念させ、米帝の戦争目的を粉砕し、戦争目的への人民と兵士の幻想―結集の解体に拍車をかけた。この優位に立脚し、戦場のかくとく目標、革命戦争を最後まで貫徹してゆく闘いの一つの政治的な攻勢の場としてパリ会談に臨んだ。米帝は革命を圧殺し南ヴェトナムを反革命の強固なとりでとして再建するという自己の戦争目的を粉砕され、しかもうち続く敗勢をくいとめながら、ヴェトナム南部をなんとか自己の勢力圏として残す余地を見出すべく、「和平」を提起した。不正義の闘いの敗北、戦線の解体に直面して、兵士をギマンし、反戦反帝闘争を慰撫し、ヴェトナム人民と取引しようとするベテンであった。

事態は帝国主義者のベテンをあっりとのりこえて進行した。ヴェトナム人民はいささかも戦場をゆるがせにしなかったし、外交は革命戦争の忠実かつ有力な武器となって米帝をさらに追いこんだ。米帝の「和平」提案が彼らの「息つき」でありベテンであることから次々に曝露された。反戦反帝闘争は昂揚し、米国に革命闘争の組織と運動があらゆるアメリカ的汚物を払いのけて台頭した。六九年、とりわけ急激なアメリカ帝国主義軍隊解体が様々の意味あいをもって進行した。

結局、これを突破口とする米帝の企図は一步の後退がより大きな解体に結びつくという、傷を深めたにすぎなかった。ヴェトナムは強固に前進し、南ヴェトナム共和臨時革命政府を組織した。これは、ジョンソン演説以来一年の総体としてのヴェトナム革命の実践的総括である。ニクソンはかかる状況で登場した。彼のうった手はニクソン・ドクトリン・グアム・ドクトリン、ヴェトナム化、カンボジア侵攻、ラオス侵攻、そして訪中声明である。

ここでは簡潔に次の点を確認すればよい。

グアム・ドクトリン（六九・七）は米帝のアジア戦略の後退・再編である。その帝国主義的論理は、「アジアの非共産諸国の発展はめざましく、中国はかつてに比して革命の輸出能力を減じた。アジア諸国の自立のときが来ており、核攻撃に対する防禦をのぞいて五―一〇年後にはアジア諸国独自の集団安保をめぐす」ということである。これは核戦力体系の優位を不断に保持し、米ソ超大国協調の基調の中で「ヴェトナム問題を解決」したうえでこの構想である。具体的な当面の核心は、（ヨーロッパでの西独帝との緊密な関係以上に）膨張した日本帝国主義の力量に応じて日米間政治的軍事的同盟を強化し、自らの後退を日帝主軸の国際反革命再編・強化として実現すること、この極東―東アジアでの当面する帝国主義的安全の保証にたつて自らを全力を、ヴェトナム化」に集中すること、これがいま一つの核心である。

ヴェトナム化」の意図ははっきりしている。米帝は軍事的にヴェトナム革命に勝てない。だが最も徹底してヴェトナム革命を許すことは南ヴェトナムの失陥から一挙の「ドミノ理論」の実現となりかねない。だから軍事的対峙を維持し、パリ会談

にはあくまでベテンの臨む。これはごまかしと少時のひきのばしにはなっても解決の道ではない。ヴェトナム人民は自己の戦場の勝利を別の形でパリでおし進めているだけだからである。かつて仏帝の敗北・ジュネーブ国際会議・ゴ・ジン・ジェム政権の脈絡で南ヴェトナムを保持しえた経験がある。新たにパリ会議とは別に国際的圧力をどう組織するか模索しよう。しかしなによりも南ヴェトナムの政権基礎が問題である。それに米国の人民に「和平」幻想をふりまき国内統合を再建しゆくにはすでに（いかにひきのばすとはいえ）段階的な撤兵はまげられない。政権基礎を安定し軍事的まきかえしを南ヴェトナム「独自」の力で作り出しおくことが眼目である——ざっと、このようにとらえることができる。ロジャーズ国務長官が「ヴェトナム化政策は、全戦闘部隊、究極的には他の諸部隊が撤退するまで、もしくはハノイが南ヴェトナム国民に自由選択権を与えるような交渉による平和の策定を決定するまで遂行され」、すでに「われわれは南ヴェトナム部隊に訓練と装備を施しつつある」（七〇年一月、外交政策説明）としたことは、パリ会議は結局は棚上げし、さしあたって米帝は直接介入をやめていくが新しい政治軍事力をヴェトナム南部に作りだし、国際的圧力—諸列強の取り引きの中にヴェトナム革命を封じこめようということの表明である。

これは米帝の意図であり、追いつめられたものの必死の願望であつても、人民の決戦決勝の力をささげざる有効な物質力とはなりえないすでに破産した「論理」である。もしもこの成功のうえにニクソン訪中があるのならばたしかに米帝は強力にまきかえしたといつてよい。事態は逆であり、この破産と泥沼化のうえに訪中のバクチはうたれていく。七〇年一月米中ワルシャワ会議再開に秘めた米帝の「深遠な」意図は成功していない。

たしかに六九年、米国内革命闘争の徹底的弾圧、反戦闘争の鎮静、「南部戦略」にもとづく国内統合の模索は進行した。そして日米共同声明—七〇年安保は決定的に重要な位置をもつ。ゲーム・ドクトリンの一つの核心の実践化であり、日帝は膨張した自己の力量をもって米帝と侵略協定の内幕を得、アジアの国際反革命盟主として登場する道を突走った。沖繩を軍事的カナムとする日「韓」台運命共同体は日本の勢力圏でありかつ反革命のとりでとして構築され始めた。ヴェトナム問題に対する米帝の地位と日帝の役わりは相互にたかく了解された。周知の日米共同声明第四項の含意は明瞭である（「総理大臣は…：韓国の安全は日本自身の安全にとつて緊要であると述べた」）「総理大臣と大統領は、中共がその対外関係においてより協調的かつ建設的な態度をとるよう期待する」「総理大臣は、台湾における平和と安全にとつてきわめて重要な要素であると述べた」「総理大臣は、日本としてはインドシナ地域の安定のため果しうる役割を探求している旨述べた。」）

これに対する国際的反撃は敏速であり、人民は新たな危険に対する結束をもつて応えた。中国・朝鮮の闘う閉結はかためられ、中朝人民の反米帝・反日帝の旗幟は鮮明にうちだされた。

一方、ヴェトナム化は果てしない泥沼化につきおとされてきた。おいこめられ、展望のない地点で、ヴェトナム化が成功しうるとすれば、六五年ジョンソンによる北爆開始時にも、六〇年南ヴェトナム解政民族戦線の結成とケネディによるテロと戦略村政策の時機にも、さらにはゴ・ジン・ジェム「政権」の直接の継承としてすらも可能であつたはずである。もともとこの二十六年間、国内支配階級を打倒し、日帝・仏帝を駆逐し、国際的圧力をのりこえ、もっぱら米帝の直接介入によるのみもちたえてきたかいらいの最後の唯一のためである、その米帝を撃破している局面で、ヴェトナム化はありえない。一時のまきかえし、「政権」の「安定」、かいらい軍の増強はありえたらう。だが、それはあくまでも虚構であつた。ヴェトナム人民は結束して飛躍を圖いとおつた。ヴェトナム南部共和臨時革命政府の樹立（六九年四月）は最後の勝利への決定的な移行を鮮明にしたものであつた。結局、ヴェトナム化のために反革命を拡大せざるをえなかつた。カンボジャのクーデクをでつちあげ、ヴェトナム化のための、カンボジャ侵略（七〇年五月）、ラオス侵略の持続と決定的拡大（七一年）。反撃は根底的であり、反革命作戦は惨めにあいついで失敗した。インドシナ五千万人民の革命戦争は固く結束してこれを粉砕した。インドシナ三國四面首脳会議（七〇年四月）は、ヴェトナムに対するインドシナ反革命包囲を許すどころか全インドシナの密集する革命をもつて応えた。中国はあくまでもこの革命の大後方として同志的連帯を堅持した。アメリカの反戦闘争は再興した。米帝軍の志気は衰え、解体と見えざる小叛乱が続出した。さらに中国は、「最大の民族的犠牲を払う用意」を鮮明にした（七一年四月）。

米帝支配階級の分裂も進行した。ニクソン政権は孤立した。手詰まりの中でうちだされた、ヴェトナム化は、いっそうの手詰り状況に投げもどされた。

革命は再び軍事的攻勢をとつた。のみならず政治・外交攻勢が米帝をさらにぬきさしならない選択におしやつている。一九七一年七月一日パリ会議でのピン七項目提案がそれである。

さしあたってここで重要なその核心は以下の通りである。

① アメリカ軍の完全撤退の期限について。アメリカは戦争とヴェトナム化を即時やめ、無条件にアメリカとアメリカ側の外国軍隊、軍事要員、兵器、資材を撤退させよ、すべての米軍基地の撤去。撤退期限を設定せよ。七一年内の完全撤退を設定するならば、安全に完全撤退させることにかんする合意及びアメリカの捕虜釈放にかんする合意がなされ、この二項の実行は同日に始まり同日に終るようになる。完全撤退とともに南部人民解放武装勢力と米軍および米陣営内のその他の外国軍隊との間の即時停戦実施。

② ヴェトナム南部の政権問題について米の内政干渉の停止、チュウをかしらとするサイゴン好戦集団への支持の停止。平和と民族和合をのぞむヴェトナム南部人民はチュウ集団をのぞいて様々の方法でサイゴンに平和、独立、中立、民主の新政権をつくれ。臨時革命政府はこれとどちらにも属さないグループの三派で広範な民族和合政府を組織しこの政府は平和回復から総選挙まで職権を行使する。この政府の成立次第、サイゴン政権の武装勢力との即時停戦の実施。

この提案の画期的な意義は、パリ会談の場を通して、一貫してベテンの態度をとり口では和平を唱え、実際には、ヴェトナム化、を推進して来た米帝に対し、戦場での、ヴェトナム化、粉砕と平行して、これ以上延引することを許さぬ状況に追い込んだことである。空軍を含む全軍事施設の撤退撤去はヴェトナム自決の前提であるが、その期限は七一年と区切られた。空軍や軍事顧問団を残していずれは撤退するが当面は、ヴェトナム化、を進めるといふニクソン構想は、現時機の、ヴェトナム化、と現時機の米軍撤退との根源的背理をするどくつかれたものであった。そして、捕虜を釈放せぬことを国内にデマゴギッシュにたてて即時完全撤退の拒否、ヴェトナム化、を進めようとした米帝の最後の口実をも封ずるものであった。七項目提案は交渉の場をギマンと逃げ道の場とする可能性を封殺するものなのである。ヴェトナム人民のねらいは明らかである。まづもって米帝の撤退を待ちとること、それは革命戦争Ⅱ内戦でも政治工作でも民族自決の条件を成熟させる。この両面の優位の確信にうらづけられて政権の展望がある。チュウ政権を孤立させ、和合政府のもとでの内戦終結の構想がそれである。ここでも米帝は七項目を受諾する以外交渉継続の可能性を失う。だが七項目の受諾は、いかなる、ヴェトナム化、をも瞬時に粉砕する。だから、米帝は七項目をのむことはできない。交渉の場でも完全な手詰りである。結局事態はこうである。米帝は軍事で政治・外交をきりひらくことも、政治・外交で軍事をきりひらくこともできなかった。全面的な行き詰まり。

こうして訪中のかげが生じた。本来、ヴェトナム化、をもって国際的な封じこめの取り引きの場を念願したにもかかわらず、その行きづまりのままいかなる足場もなく取り引きを期待して訪中のかげはうたれようとしている。つまり、七項目をのんでチュウを粉砕されるにまかせることができずあくまでかいらいの中の内政からいまや依拠しうる唯一の勢力たるチュウを手放さずに見通しのない、ヴェトナム化、にしがみつき、ことに国内人民の圧力（七項目をのめ）から身をかわし、七項目を棚あげにして、何らか別のところに国際解決の新しい曙光があるかのようにベテンにかけ、しかも実際にあわよくば中国との取り引きでうまくやるかもしれないというかけ。なぜ中国とか。ヴェトナム革命は米ソ体制を突破したのであるから、ソ連との取り引きは有効でないからである。

だがニクソンのギマンの大バクチは一連の反革命軍事・政治・外交と同様に、さらに大きな窺地に追いこまれることは確実

である。あたかもヴェトナム反革命が軍事、政治の敗退を通して撤退に至らざるをえなくなってきたように、より大きなサイクルでこのカケは対中国反革命からの後退であり、その自壊を促進するからである。本来、革命の封じこめのために発生した問題の解決のために革命の、元凶、に頼みこむことが米帝の思うようにはいかなかった。また、この中国―ヴェトナムの大国主義的離間策、取引の願望は、「中国革命の承認」という中国革命以来の米帝の中国敵視・国是からの背反をあえてして始めて成立の一条件をうるけれども、そもそもそれは米帝にとってヴェトナム反革命を根拠づけてきた論理を根底からうち砕くものである。

まして一致団結・統一して反米帝の永続性につき進んできた中国―ヴェトナムがここで乗せられることはありえない。米帝は一時しのぎと長期戦略をもって中国に好餌をちらつかせた。だが、中国には、取り引きの必要も用意もいささかもない。中国の意図は取り引きたいという米帝の窮状について、ヴェトナム、中国の革命をおしすすめるべく、米帝の立場を有効にバクロし、その窮地をさらにおし進め、のみならず、戦略再編全体に深刻なショックをもたらすことである。すでに台湾は深刻な動揺におちこんだ。それは日「韓」台連命共同体の危機である。そして日帝の侵略・反革命に困難を集中する。

### 〈中国革命とニクソン訪中〉

④ ヴェトナム策全般の破産と手詰まりからニクソンを訪中というバクチと屈服、そこからしか新たな対外戦略の陰謀の糸口をつかみえなくしたもう一つの主力は、革命的労働者国家、とりわけ中国の闘いとその力である。われわれは数世代にわたる永続的な革命の発展過程として、今日の地平をつかまねばならない。ヴェトナム革命は革命的労働者諸国家を大後方とすることができたばかりではない。なによりも中国革命の成立がきりひらいた世界史的な地平で、そのような世界的規模の革命闘争の発展段階に依拠して自らの徹底化のコースを歩みえた。中国革命の歴史のまににヴェトナム革命の永続的貫徹はありえなかったであろう。米帝を基軸とする世界支配秩序―国際反革命自体、この植民地・半植民地からばつ興した世界革命闘争に拘束され、対抗的に物質化されたものであった。成立した革命を不徹底にしソ連的に墮落させ、変質させること、新たな革命を粉砕すること、（そうすることによって帝国主義を再建し、維持すること）これらは国際反革命にとって統一された任務であった。革命はソ連の墮落と闘い、労働者革命国家として世界革命をめざして発展しつつもちこたえること、かつ新たな革命を断乎として推進すること（そうすることによって帝国主義心臓部のプロレタリア革命闘争を再建し、発展させること）これらが

革命の統一された任務であった。この、中国革命からヴェトナム革命に至る革命と反革命の国際的拮抗が、反革命の後退・革命の発展、反革命の包囲の失敗・革命による包囲の突破に至っているのが今日の事態である。

これを中国革命に即してみるならば、中国革命の内包的永続性（日本帝国主義の侵略の一掃・蔣介石国民党政権の打倒による新民主主義革命からプロレタリア独裁の樹立へ）、米帝反革命との対峙、ソ連修正主義の支配と浸透の拒否、プロ独下の階級闘争、文化大革命によるプロレタリア革命派の勝利）による世界革命のとりでの堅持・発展と、外延的永続性（朝鮮革命戦争、とりわけヴェトナム革命戦争）による革命の拡大との複合的に一体となった力が、革命的労働者国家の陥落による新たな革命の流れ、新たな革命の任務による革命的労働者国家の陥落をねらう米帝国際反革命をうち破ったのである。

実際にニクソン訪中の意味するいま一つの具体的内容は一貫して敵視し、圧殺し、封じこめようとして、直接介入をのぞくありとあらゆる手段をとってきた中国革命を承認せざるをえないということである。これは屈服である。かつて台湾を除く全土解放をなし朝鮮解放戦争に同志的参戦をもって革命を防衛し拡大しようとした中国が、主要には帝国主義国プロレタリア革命の主体的未成熟のゆえに台湾を未解放のままとし米帝反革命のとりでの一つとさせざるをえなかった歴史的境界の突破を意味するからである。二〇年前の世界的な革命と反革命の拮抗が、封じこめの構造が、世界革命の現実の力と正義の強制のまゝに屈服をよぎなくさせられつつあることの表現である。

むろんニクソンの意図は、直接的短期的には、ヴェトナムの手詰りを軍事的にも政治・外交的にもヴェトナムとバリの頭ごしに、中国革命の承認という代償をもって中国と取引し、ヴェトナムの完全な失陥・東南アジアの「ドミノ理論」的崩壊をくいとめることを期待している。これを突破口に、グアム・ドクトリンを補修・復元し、中国を大國主義、超大國・特權國への道にひきつりこみ、よろしくやろうということである。あるいはまたもつと機會主義的な、ヴェトナムの手詰りを打開する、息つき、を国内的國際的に平和ボーズで幻惑して得ようとするベテンかもしれない。

しかし、この意図はもつとも惨めにバクロされ、粉砕されるであろう。そもそも現在に至った永続革命の行程がこれと闘いこれをうち破って進み、とつきののりこえてきているからである。革命が革命を裏ぎることはできない。中国革命がヴェトナム革命を裏ぎることはできない。革命の右手が左手を、共通の心臓と頭脳のもとに撃つことはない。

ニクソンのうつつ手はすべて両刃の剣である。おいこめられてかえす刀でつねに自分自身を傷つける。より深い傷、より大きな策謀、より大きな窮地へ。ヴェトナム革命と中国革命とを中国と取引しようとすることは、ヴェトナム反革命戦争の根拠づけを根底からくつがえすものであり、根源的に本末転倒である。皮肉なことに、对中国反革命に始まりその延長上にヴェ

トナム反革命を展開しながら、その行きづまりの打開のために、中国革命の承認をもってヴェトナムを維持しようとする当面のねらいは、もともとどうしようもない悪矛盾につらぬかれていく。これは一種の分裂策動であるが、しかし、ある部分の犠牲である部分をとるという手直しのきくような問題ではない。非妥協的に貫徹し、ニクソンの意図をふみにじって貫徹している事態の論理は、最近突出した部分（ヴェトナム）の反革命の失敗が戦後反革命基調全体の失敗に結びつき、突き出した部分的部分的処理能力を失い、全体的後退に至らざるをえないということである。ヴェトナム反革命介入は結局おもしろもどされてヴェトナム革命の力のまゝにヴェトナム人民の自決に至らざるをえなくなった。この尖端を上部構造として封じこめられたアジア革命の全体が封じこめを突破しつつあるのが事態の論理である。米帝は部分の困難を全体の困難へ、尖端の破産を根源的破産へと投げかえしているだけである。ベテンのからくりとはこのようなものである。米帝は結局、ヴェトナム戦終結の課題だけとなくすでに中国問題解決の難問を現実にかかえこみ、手詰りを増幅する。ベテンの意図をもつた米帝の「米中関係改善」は、その発表だけで、ヴェトナムのいかいらいをより窮地においこみ、米国内にヴェトナムか中国かではなく、中国からヴェトナムまで一貫した米帝反革命史の清算をもとめる広汎な流動をもたらしている。のみならず、グアム・ドクトリンの一方の核心・日米反革命同盟「日韓」台運命共同体に深刻な困難を招来した。それは、本年秋から来年五月訪中までの訪中構想の具体化につれていっそうにつめられるであろう。

米帝が取り引きの場に中国を捕捉したのではない、中国が米帝を捕捉し米帝の陰謀をバクロし追撃しさらに新たな危険に對決する新しい「戦場」をきりひらいたのである。

ニクソン訪中は、ニクソン・ドクトリンの脈絡、その破綻の脈絡の中に位置づけられる。それはどんづまりにゆきつく。米帝の意図と貫徹する論理とは対立する、米帝の意図と中国の意図とは対立する。中国の意図は革命の理を体現するかぎり貫徹する。それは最近の国際路線に具体的にあとづけることができる。

中国におけるプロレタリア革命路線の勝利とより下層の人民大衆の権力掌握をふまえつつ、國際的な大再編を主動的におし進めることを基調とした路線。すなわち、帝國主義の侵略・反革命と闘う最前線を基準とした革命戦争、革命的労働者国家、帝國主義国プロレタリア人民の連帯の強化・拡大。これを制動する組織された反革命たる社会帝國主義との対決——これとの分離を闘いとり党と国家に構造化し世界の革命的人民と結びつくこと。これらを主軸として世界・各国での友や敵内部の矛盾を主敵撃滅のために活用すること。大再編の認識と闘争方向の基軸は、世界最大の敵・米帝の侵略・反革命を打破し後退させうる局面にはいっており、その追撃を軍事・政治でも、前線・敵後方でもやりぬくこと、しかも新たなアジアでの主敵・日帝

の侵略・反革命を先制的に撃破することである。

ヴェトナム―インドシナ人民の自決をふまえた国際連帯（「インドシナ五千万人民の大後方としての中国」「ヴェトナム革命の勝利は世界の最優先の課題である」「中国は最大の民族的犠牲性義勇軍派遣」の用意がある）、日本帝國主義に対する中国・朝鮮人民の結束の強化。なによりも、帝國主義圏内、帝國主義国内支配階級の分裂を促進し、照準は帝國主義国内人民が強固な革命党をもって戦列につくことにおかれている。

### △アメリカの革命闘争▽

⑤ ニクソン訪中をつき動かした第三の要因は、前二者に規定され組織されて、三、四〇年来解体をよぎなくされてきた帝國主義国とりわけアメリカのプロレタリア人民が闘いとしてきた広汎な民主主義闘争、反戦闘争と並行する本格的な革命闘争の再建である。むろんこのことは、単純に米国内革命闘争が六〇年代中葉以来一貫した強化の道を進んでいることを意味しない。事態は極端な曲折に充ちている。しかし、最初の難関は突破された、不可逆の種子はまかれたのだ。

アメリカがそうぐうした対外危機がかつてなく大きく深く後退以外に解決不能なほどであることは、そのまま国内危機によつてもたらされ、それに対応し、それに逆流する。全国民的危機の長い始まりが始まっている。国内がうって一丸となつてうちたてた世界支配の犯罪性はアメリカの惨めな敗北という経験を通じてバクローされた。アメリカの世界的地位の幻滅と怒り、不信は、アメリカ国家、権力、社会、生活、価値への不信・離反・反抗であり、別の体系、異質な原理への広汎な人民の自己決定による持続的闘争の始まりであった。かつて三〇年代以来、かく確立された国内統合、どんな有効な革命的なラディカルな闘いの芽生えも瞬時にして圧殺し、かえつてそうすることによつてますます強固に自己をかためてきた国内統合は統合内分裂から統合そのものを争う分裂に深化しつつある。上層は今までもおりのやり方でやっていけなくなりつつある。下層はいままで通りのやり方で支配されることを拒否しつつある。すなわち、帝國主義ブルジョアジーに自己を一体化し、従順に支配されることによつて侵略・反革命をなすこと、すなわち国際的に支配民族としてあることの破産と不正義を経験によつて学びとりいまや逆流して支配されることそれ自体に反抗を開始した。

重要なことは、最下層たる有色人種の反乱、インテリの離反、そして軍隊の解体である。

再確認しておくべきは、未曾有の対外危機が環流して生じたかかる国内危機は革命のはじまりであり、革命を闘いとする勢力の凝縮がなされるカオスとしての基盤であり、かかる心臓部の動揺をもたらしたた国際的革命的攻勢はかかる力量をもつほどに成長したのであり、そしてこのこと自体決定的な力の登場を予測させるものであることである。

米帝は国際反革命に失敗し、恐るべき爆発力を秘めて台頭する国内の主敵を片づけ、同調者を一掃し、膨大な離反中間分子を再結集することなしになごもやれなくなった。火のついた帝國主義心臓部を自ら主戦場に選んでのである。国際的な革命の攻勢は、米帝の侵略・反革命の直接的な介入をうちくだいて、新たな革命の主力を心臓部に組織しはじめることによつて、革命の主戦場を心臓そのものにおいあげはじめたのである。

ニクソン訪中の眼目の一つは、国内統合の再建である、むろん「米中接近」「米中平和共存」のイリュージョンが米帝内外威信を回復し、離反した中間動揺分子よびもどして強固の基盤の土台となることを期待し、革命派が国内階級の平和共存の幻想のとりことなることを促進し、なお突出する部分への暴力の貫徹を有効ならしめようとする幻想である。こういうペテンを突破して進みうるかどうかは、主に米国内革命的な人民の責務である。米国民は、国際的な革命の援助をうけて、より強化された条件でこの攻撃にたちむかいうからである。これが歴史のきりひらいた地平に位置しているプロレタリアートだからである。

しかも、ニクソン訪中の受け入れに際して、従来よびかけてきた国際的な反米帝闘争のよびかけとともに、アメリカ人民の革命的発展をも考慮して決定したとの周恩来言明の含意をよみるとる能力がなければならぬ。

肝心なことは、外からの革命的攻勢に敗北して帝國主義の国内危機が生ずることではない。外からの革命と（たとえ不均等・不均衡にはあつても）あいたずさえて、主動的に対外危機を国内革命情勢にまで窮極化する帝國主義国内プロレタリア人民の現実の具体的な革命能力のかくともにある。それは今日のカオスをついて人民の革命体験が社会と国家の全領域で巨大に進行し国家の対極にプロレタリア革命党に統合される運動の確立にはかならない。そこに至るまでの根源的なアメリカ革命運動自体の再編、創出の必要、これをアメリカ人民こそが主動的にならざるを得ない。その間に至るまでの根源的な国際路線の核心をここに見出すべきである。それは、日帝に対する攻撃、日帝主流に対する種々のブルジョア的小ブル的反対派の対立の活用を通して、日本におけるプロレタリア革命党形成を日本プロレタリア人民自身に期待し、促進し、要請して、いふことと全く同質なのである。

⑥ こうした見地を総合するとわれわれは、闘いとられたものが何であり、あるいは闘いとられつつあるものが何であり、世界的に誰が攻勢にたち、誰を追いこめたのか、そして、誰に飛躍が問われており、それはどのような時代の結着、新しい時代の始まりかを明確にとらえることができる。

第一に、闘いとられたもの、闘いとられつつあるものは、アメリカ帝国主義の反革命の後退であり、新たな膨張帝国と結託しての再編過程自体の困難の増大、集中であり、かつ後退が後退をよぶ過程の始まりである。これは世界的規模でみるかぎり、革命が重要な包囲を突破して攻勢に転じつつあることである。なぜなら、一貫してどのような革命も闘いとることのできなかった米帝包囲を突破したことは、たんに植民地、半植民地革命を封じこめただけでなくそれが宗主国の革命に永続、転化するのを防ぐ主要な敵の力を尖端においては粉砕したことだからである。革命戦争は一貫してファシスト帝国主義や老衰帝国主義を駆逐し、敗北せしめ、直接に革命的危機をよびおこした。それが砕かれたのは、帝国主義国プロレタリアートの未成熟とソ連修正主義の制動とともに、主要な敵の要因としては明白に米帝の力であった。このこえるべくしてこえなかった壁を、二〇数年の苦闘によってこえ始めたことの決定的意義をつかまねばならない。戦後世界体制は、超大国間の反人民的取引きによってでもなく、帝国主義諸国間の対立を主導因としてでもなく、世界的規模の革命と反革命の苦闘、国際階級闘争によって革命的に清算されつつあるのである。

第二、かかる国際階級闘争の主力は、有力な一環として急速に帝国主義国革命闘争が登場しつつあるとはいえず、革命的労働者国家と後進国革命戦争である。このことは二点において正確に、厳然と確認されるべきである。すなわち、本来的には前衛であり世界革命の主導勢力として後進国革命闘争を主導すべく位置する主要先進国の革命は、三〇年代の根底的敗北、解体以降、たんに革命をやりとげなかったというばかりでなく、帝国主義の侵略・反革命の有力な制約となる革命闘争によって、世界革命を促す位置にたつことはなかったものであり、中国革命以降の後進国革命の内包的永続革命の、二重三重の逆境をついた数十年の経験に媒介されて始めてプロレタリアートとしての回生を始めたというのが、逆倒して、しかし絶対的な真理として、展開してきた世界革命の歴史的现实であり、世界プロレタリアートのパラドキシカルな曲折に充ちた自己形成史の真実にはかならないことである。

いま一つに、たんにヴェトナムという現在の直接的戦場の結果としてとらえるのではなく、先進国革命の敗北以降の後進国革命主導の世界革命の全永続過程の結果、その歴史的に累積された複合的総力の集中としてとらえるべきだからである。第三にまた、この構造を持統するだけでは世界帝国主義の打倒はなしえないこと、これは高度化を求めていることを確認することである。もしも革命的プロレタリアートが独自に登場しえないならば、そのようにすでに決定づけられているのならば、まさしくこの構造のままになお新たな長期の拮抗関係がつづけられ、革命が文字通り外から帝国主義心臓部に戦争をもつてきりこむことに展望を托す以外にないであろう——今日の革命的労働者国家等に想像を絶する苦闘を強いて。このように考えることはただ没主体的になることよってのみ可能である。これは自己を解放する者とせず、解放される者とする去勢者の立場である。これは歴史的现实としての自己の位置を具体的に見定めえずにあたかも一貫して帝国主義国プロレタリアートが世界革命の前衛であり、主導者であるかのように思いこみ、対処し、行爲するものの盲目のうらがえしのあやまりである。然り、われわれは、この構造が推転——再び逆倒さるべきこと、まさしく帝国主義国プロレタリアートが決定的に登場するにはこの逆倒を通して再逆倒を闘いとることとしてはじめて可能であること、それは恣意によつてではなく、この逆倒構造の中で、再逆倒の客観的要因の成熟が闘いとられてきたことを通して主体的に可能となるし、なりつつあることなのである。したがって第四に、世界革命闘争の旧来の構造の終りの始まり、これが戦後体制の革命的清算のいま一つの側面であり高度化への移行の現実である。

事実がこうあるべきだったとか、こうあることが可能であったとかの検討はともかくとして、世界革命が、われわれの想像を絶する不均等、不均衡に発展し、しかも反動への転化をはさんだ長期の曲折に充ちた行程として開けてきたし、いぜんとしてそうであるのが歴史的现实である、実際に世界革命闘争が今日のように同時進行すること自体、あまりにも不均等、不均衡なことこの端々な実証である。それは、相互に浸透し、相乗しあい、複合的に進む永続性である。

一言で要約すれば、帝国主義の侵略を粉砕し、反革命を突破し、帝国主義の対外危機を国内に環流し、そのもたらす国内階級危機を帝国主義打倒に転化すること、である。帝国主義の対外危機を革命戦争・労働者国家が主力となって闘いとらつつある局面から、帝国主義国プロレタリア人民が主力となって心臓部で帝国主義打倒そのものに進む局面への移行期である。これが今日具体的に進行してきた世界革命の永続性の構造である。

心臓部の結着は文字通り窮極の死闘である。いままでの条件、やり方でやっていけない対外危機は別の仕方でのその解決を求めないのであり、帝国主義は打倒されないかぎり侵略・反革命が存命の鍵である以上おいつめられてなお新たな侵略、反革命を模索するのであり、より強力な敵非革命と闘うための新たな力の源泉は、旧来の国内支配のあり方を再編し国家形態を反革命帝国主義軍制としてにつめる攻撃にしか求められないからである。これは対外危機が自国革命に連なることへの反革命軍制

であり、この攻防に勝ちぬくことに帝国主義打倒の展望を見出さねばならない。だから、移行期の任務は決定的に重要である。対外危機を極点まで進める闘いを次第に主導的に荷い、帝国主義の国際的へゲモニーの喪失を国内へゲモニーの連続的解決としゆく革命主体の編成がカナメである。

われわれは現時機からの戦略的任務とその具体化にからねばならない。

## Ⅱ 米帝を追撃し日帝と対決せよ！

### △戦略の主要方向▽

⑦ 帝国主義心臓部での死闘に移行しつつある現局面でわれわれが主要な戦略的方向とすべきは以下の点である。

第一に、アメリカ帝国主義の対外危機、侵略・反革命の危機を更に深く、更に鋭くつくこと、米帝にたいする無慈悲な追撃。

米帝の侵略・反革命の危機は主要にヴェトナムの敗勢と手詰まりにおいて生じ、中国にたいする取り引きの破綻から更に拡大するのであることを見抜くならば、追撃の主要な課題は明白にヴェトナム革命戦争の軍事的勝利とそれにもとづく中国革命の勝利的結着である。もつとも惨めにアジアでの米帝敗退を刻印すること、これは最大最強の帝国がなお持続する世界反革命の地位と役割りに引き続き動揺をもちこむためにも、アメリカ内部の思想的挫折を伴った亀裂を更に拡大するために、絶対に不可欠である。米帝にたいする追撃とそれに依拠しての帝国主義にたいする永続的戦闘、この主要な任務の外に、それとまじりなし、無関係に、あるいは敵対して、世界革命の生きた実践がありうるかのような見地と断乎闘わなければならない。

第二に、日本帝国主義の侵略、反革命の対外困難を集中し、持続的な国内危機に転化すること、いまやアジア反革命の主要な危険でありしかも第二の弱い環となりつつある日帝の侵略、反革命との対決。

日米共同声明七七〇年安保の枠組みを確定する中で進行した対外的には日「韓」台連命共同体、国内的には四次防を始めとする侵略、反革命の政治、軍事、社会、文化の全領域での国家態勢の構築、結び目の環としての沖繩「返還」協定の調印、侵略・反革命前線基地化は、米帝の相乗化してゆく対外政治・軍事的困難から運動する日「韓」台連命共同体の大動揺を突破口として沖繩「叛軍」を主軸に反撃されねばならない。日本が敗戦し急速に膨張して、米帝の後退、革命の攻勢の中でアジア反革命の主役となりつつ自己の侵略「勢力圏」をかためねばならないという矛盾のゆえに対外困難の血路をつねに国家形態の反革命専制としてのりきろうとすることからして、国際的人民の反日帝闘争と日本人の反日帝闘争が固く結合して国内危機に主導権をうちたてるよう対外危機を闘いとらねばならないのである。

さらに、ヴェトナム革命、中国革命の勝利的過程が日米両帝国主義にたいする「韓」因、カンボジア、ラオスをはじめとするアジア全域の革命をおしすすめることである。それは当然にも帝国主義心臓部の革命闘争の再建と連動する。とりわけ日本、「韓国」、台湾はそうである。日本の闘いは、ヴェトナム、中国の攻勢からの更なる飛躍の鍵である。

これらを、世界革命の主体形成の見地からすれば、帝国主義心臓部、とくに米日の革命的プロレタリアートが帝国主義の侵略・反革命のもつとも惨めな破産、根底的持続的危機を自ら闘い、とくに米日の革命的プロレタリアートが帝国主義の革命的敗北主義の旗幟を鮮明にし、革命的労働者国家・革命戦争がきりひらいてきた世界革命の歴史と現実に依拠しうる能力をこの実践を基準として帝国主義民族としての歴史、現実を総括、検証し、旧来の民族共同体—国家社会に対決する世界革命共同体への道を革命的労働者国家、革命戦争と一体となつて自国内部にもちこむということである。

だから、弱い環への追撃と新たな危険との対決という移行期の戦略的任務の遂行は、とりわけ帝国主義国の革命闘争にとつては、情勢と任務の具体的核心をより全体を見わたして具体的に遂行することなくして不可能である。革命戦争、革命的労働者国家と帝国主義権力との当面の攻防の焦点にたいして帝国主義国プロレタリアートが具体的に明瞭な態度をとることが、帝国主義に対する足下からの攻撃、労働者国家、革命戦争に対する具体的な連帯である。そしてそれはそれをなしている状況をすでにきりひらいていることにこそ、われわれが労働者国家、革命戦争から受けている支援があり、なしとげること現時機のきわめて具体的な自己教育があるのである。

日本の革命的左翼に欠落するもつとも大きな欠陥は、かかる具体性がないことである。

### △米帝への追撃▽

⑧ 米帝追撃の具体的核心をとりだしておかねばならない。

第一、ヴェトナム革命戦争の勝利のために。

あらゆる形態の軍事攻勢を支持し、七・一付ピン七項目提案の即時受諾を米帝につきつけ、ヴェトナム化、粉碎・米軍即

時無条件撤退・ヴェトナム人民の自決を闘いとする。

われわれはあらゆる意味で、ヴェトナム反革命に対する闘いでヴェトナム民主共和国およびヴェトナム南部共和臨時革命政府・解放民族戦線が最もよく闘いを堅持し、闘いの方向を示していることを認めなければならない。だから、直接にヴェトナムでの闘いに帝國主義国プロレタリア人民も革命的労働者国家もヴェトナム人民の要求には応える義務はあってもあれこれ口をはさみ指示する必要など全くない。独自の戦場でヴェトナム人民と連帯して米帝をおいつめるべく創意をもって闘うのであり、それは当面するヴェトナム人民の軍事攻撃を無条件に認め、七項目提案に対する完全支持に立脚しなければならない。

ニクソン政府は七項目提案を即時のめ。

これがヴェトナム人民が決してひかぬ一線であり、更に米帝を追いつめる原点である。他の世界プロレタリア人民はこの核心のもとに結束しなければならない。とりわけ、ニクソンの棚上げ、ベテンが続けば続くほど、この結果のまゝに、ヴェトナム南部のいろいろな政權下の人民、軍のチュエーからの離反、反抗が高まる。ヴェトナム南部の八月選挙一〇月大統領選挙はサイゴンはじめ諸都市を政治危機に投げこむだろう。また同様に、この具体性をもってニクソンをあばき、攻撃することにこそ、アメリカ人民のヴェトナム人民との一体化があり、この中でもっともラディカルに、持続的に、未来にわたって闘いを挑むプロレタリア革命派の結束と再建をからとる条件があるのである。

そしてまた、今日全世界に胚胎している後進国革命戦争は、自己の進む原則と現実的コースを實際教育によってかくとくするのである。

第二、中国革命の結着のために。

ヴェトナム革命の手詰りを中国革命と取りひきしようとする米帝の訪中意図を粉砕することは、ヴェトナムからの米帝追撃の拍車であるとともに、**中国革命による米帝追撃という革命の密集を意味する**。もちろん、中国が米帝の取り引きに応じ、あるいは、乗ぜられて、反帝闘争を宥和に転ずるならば、これは世界の革命戦線の新たな分裂と混乱であり、中国の裏ぎりである。しかし、中国は決して裏きらないという根柢をすてにわれわれは確認した。われわれはニクソン訪中がもっているベテンをバクロし、粉砕し、よりいっそうの巨大な手詰りに米帝を追いつむべき中国の闘いに期待し、要求し、連帯し、かつわれわれ自身促進する。中国が実際に開かれた場合の米中会談で、ヴェトナムの取り引きを一切拒否し、七項目をのみことだけが米帝の選択の道であることをつきつけることは最も有効なバクロと攻撃である。そのうえにたつて中国革命自体の要求を原則的に展開することは当然であり、ここでも米帝はぬきさしならぬ手詰りに追いつまれる。かりに米中会談がとりやめになる場

合——それは中国が会談に先立って米帝をもっとおこみ拒否するか、米帝がますます見通しきなおじ気づいて取りやめにするか、であるが——追いつまれるのがニクソンであることは一目瞭然である。だからわれわれは米中会談に賛成する。このことを通して**米帝のヴェトナム問題の血路は断たれるだろうし、台湾問題で中国革命の前進が明らかだからである**。七一年五月までの訪中以前に、秋の国連総会での中国国連加盟問題は、ニクソン訪中の前途を一挙に照らしたであろう。

台湾問題は中国革命の残された問題であり、かつ中国の主張と態度は全面的に正当であり、世界のプロレタリア人民はこれ以外にいかなる主張も態度もない。それはヴェトナム革命に対するのと全く同様である。これを実現することは中国革命の当然の権利であり、帝國主義の侵略・反革命（米帝）をうちやぶり、その再編（日帝）に重大な混乱をもちこむものであり世界革命の利益に完全に合致し、かついまやその機が熟しているのであるから、機敏にこれを米帝追撃の主要課題の一つとするべきなのである。

すなわち、「二つの中国」の原則にたつて、中華人民共和国の承認、米台関係の一切の破棄、台湾からの米軍撤退。

すなわち、中国革命を承認せざるを得ない世界革命闘争の高まりに直面して、なお「旧友」「蒋介石」「政權」との条約上の義務を守るといふ米帝のごまかしとデレンマをついて、きれいきっぱり台湾から手を引き中国を承認し、反革命を清算せよというものが、世界プロレタリア人民の共通した立場であり、ニクソン訪中というベテン、それによって生じている動揺を逆手にとつて、時機を逸せずきりこむべき核心である。そうすることによって、すでに生じている手詰りをいっそう、どこへももつていきようのない極点におしやることができるし、そうすべきなのである。あえてニクソンをして、米帝アジア反革命の末路を歩ましめよ。

中国国連議席問題は重要な一環である。同じことの国連という一舞台での展開である。だからわれわれはこれを素通りしてわれわれの闘いを進めることはできない。ここでバクロ、闘いを、米帝追撃の有力な一環とすべきである。すなわち、世界プロレタリア人民は無条件にアルバニア決議案に賛同すべきである。中華人民共和国に国連総会および安保理事会常任理事国の地位を復活し、「国府」を国連そのものから追放すること。したがってこれに反する「二重代表制」「複合二重代表制」「逆重要事項指定決議案」などの様々のベテン、あがきはあつさりとおしおしける必要がある。そして現時機をそれらの意図と役割りを広汎にバクロしなければならぬ。（逆重要事項指定の元凶は日帝である）ここでも中国の態度は全面的に支持すべきである。

すなわち、アルバニア決議案の内容でなければ国連に復帰しない、台湾の追放は前提である、と。ここには、国連における

この攻防がもつ意味をうきまきりにしている。中国の承認への道は、国連で二つの中国を既成事実化することを絶対に拒否し、かつ国連がそのような機関であることをやめさせることである。われわれは米帝追撃という見地からも、米帝の対中国ペテンを拘束する台湾追放をかちとらねばならない。国連でのそのような事態は台湾問題の革命的結着への前進であり糸口である。

台湾問題について、原則的解決のうえにどうするかは、全く中国人民の手にゆだねることが当然である。中国人民は全くプロレタリア革命的に有効な闘争形態を駆使して解決するであろう。それは本質的に七項目にもとづくヴェトナム革命の結着を求め、求めると同一のものである。

必要なのは台湾の内から、あたかもチューが孤立していくように蔣一派の孤立をもたらし国際的条件に全力をあげることであり、とりわけ日帝の様な支配と干渉を粉砕することである。

(ちなみに、国連に対する評価。アルバニア決議案が多数を得、かつ逆重要事項指定も粉砕されるかもしれないという趨勢、その数量的表現はそのまま世界革命の力ではない。しかし世界革命の力の一反映である。すなわち人民の闘いの庄力をうけて、中国革命の承認のうえに自国の路線をしこうとする新興民族主義諸国、中小国、さらには帝國主義諸国が革命國家に同調していることである。もちろん、階級利益・国家利益の確保をめぐらんで。しかし重要なことは、帝國主義列強間対立の主要な二つのブロックが主動勢力となつて中国議席の成否がとりざたされ、中国はその対立につけこむという歴史の段階ではないことである。革命が主動権をとり、中小諸国をひきつけ、帝國主義の中に分裂をもちこんでいるのである。だから、このことの貫徹はこれを阻む帝國主義列強とかいらいに對して革命的インパクトをもつ。のみならず、同調した帝國主義國、中小諸國支配階級に對しても思惑をこえて作用するであろう)

(また、国連がこのようなものであるかぎり、それに参加することは革命國家が有力な革命外交の場をもちうることである。だから国連対策という見地からすると、中国はそうなりうるような展望を促進する復歸の仕方を求めているのである。革命國家の國際的闘争の場としてはあくまで一つのかぎられたものとして位置づけている以上、それは正当である。世界革命のための國家間外交の一つの場——超帝國支配独占と闘いうち破っていく場と道具として位置づけるかぎりである。

われわれは、中国がきわめて原則的に国連参加および参加の仕方を追求していることを意識的無意識的に無視して、あたかも国連参加そのものがまちがっているかのように論ずる傾向を知っている。國際機構に参加し、帝國主義と同席し會議すること、旧來この機構が果してきた反動的役割りへの屈服もしくは免罪であり、帝國主義あるいはスクリーン主義の汚染に汚されるのであり、大國主義にまきこまれ國家間取り引きの論理にしばりつけられるのであり、あるいはもととそうだから参加

を求めるのだというわけである。これは、革命はただ歴史の没落者から影響をうけ、汚され、墮落させられ、ほんろうされるだけだと考える謬論である。革命は帝國主義と同調し、親和し、あるいは彼らを眼りこませて前進することはできないが、彼らをバクロし、対決し、拘束し、打倒するべく人民によびかける攻勢をとることができる。そのような歴史の段階が来ている。

米中會談それ自体への小ブル的反発についても同じように云える。會談それ自体が大國主義であり、取りひきであり、屈服、裏ぎりであるかのように。だが、中国は、まるで男と同席するだけで犯されるのではないかと考える古くさい処女ではない。そのような妄想は、とにもかくにも中国は排斥するという帝國主義の論理の裏がえしであり、あるいはつねに影響されることのみを恐れる臆病な小ブルジョアジーの特性とどこがちがうであろうか。中国は戦争・革命・建設・外交の数一〇年を生きてきた存在である。革命的左翼の中のこのようなかびのはえた儒教的処女觀念、無邪氣な左翼小病児は一掃されねばならない。こんな人達は、ブレスト・リトウスク講和で独逸帝國主義とわたりあったトロツキを、重慶會談で蔣介石とやりあった毛沢東を、そしてパリ會談にのぞんだヴェトナムの革命家たちを革命の裏ぎり者といわねばならないし、一九六八年九・三〇大衆同交で古田体制をおいつめた日大全共闘を裏ぎり者集団と烙印するのであるか。

無邪氣な左翼小病児は、当のその攻防点を具体的に結着づける時機の成熟しているいま、反動に転化しかねない。それは革命に水をかけ、米帝を宥和し、日帝を免罪し、かいらい・反動を救済する役割しか果さないことを身にしみて痛覚すべきである。)

## 〈日本帝國主義との対決〉

(9) 第二の主要な危険・弱い環たる日帝を攻めることは当然にも第一のこととの連続性、全体的一環として位置づけられるものである。日本プロレタリア人民が主要に日帝との死闘を独自に日本国内でやりぬく主客の条件を形成するうえで、世界プロレタリア人民が現にきりひらいている世界革命の永続性に依拠し、ここに飛躍と完成のもつとも主要な力として登場すべきことはもちろんである。

私はいまままで度々、新たな日帝の侵略、反革命の必然性とそれがもつ特有の困難、それゆえに國家形態の反革命的推転としてあらわれるであろう危機を指摘してきた。(たとえば、『敗北の教訓』「構造」七〇年四月号所収。)

その主要点を摘記すれば以下の通りである。

対外的困難。日帝は敗戦帝国主義として広大な植民地、半植民地、勢力圏を失した。戦後米帝一元体制のもとで経済的に著るしく膨張し、産業構成を高度化し、重化学工業を主体とする巨大な世界第三位の経済大国となり、諸帝国主義列強、ことに米帝に対し、その国内国際市場に経済的に進出し、市場再分割をおし進めてきた。同時にそれは主に日勢力圏、したがってアジアに対する経済侵略であり、なしくずしに勢力圏に編入する攻撃であった。最近の必然性は日帝がこの限界を突破して政治的軍事的勢力圏として確保することであり、経済的にはともかく、政治的軍事的に無とされた敗戦以降のギャップを歴史的に蓄積され増大する諸民族の反日帝闘争をついてなきねばならない困難、いわば、日帝が対外的に確立している経済と政治・軍事との不均衡、これが第一である。第二は、日帝の復活、膨張は勝利し日帝を略奪した米帝の一元体制のもとで始めて可能であったが、日帝の復活、膨張は当然にも同じ米帝一元体制を帝国主義的につき崩すし、現に進行していることから生ずる困難。すなわち、主要に政治、軍事の側面では、米帝一元体制の崩壊が帝国主義「共同利益」非国際反革命の米帝の役割を必然的に後退させるなかで自らこの国際反革命の主軸となつていかねばならないことである。きわめて荒々しく復活し膨張したとはいえ、米帝の政治的軍事的力量にはるかに劣る日帝が、核戦略をめぐる対立をうらにもちながら、米帝の後退を国際反革命として再編しなければならぬ困難。それは第三のことに総合して凝縮する。米帝国際反革命の成立自体、世界革命ことにアジアの民族解放・社会主義の永続革命戦争に対決するものであった。日帝ははるかに米帝に劣る国際的地位、はるかに劣る政治、軍事力、および侵略、反革命の内外にわたる国家的統合力をもって、はるかに強大化したアジアの革命戦争に臨まねばならない。すでに米帝が惨めに敗北した状況下で、しかも米帝がソ連修正主義を味方にしたとき体制を独自にうちたてる展望のきわめて稀薄の中でやらねければならないことである。

今日、急速に顕現して来た情勢とは、一般的にとらえられたこの第三の点の具体化にほかならない。

国内的困難。このこともまた敗戦したことに規定される。主要には、強力な帝国主義ナショナリズムをその対外的地位、その政治的軍事的上部構造、及びイデオロギーの上部構造もともに「戦後」米帝一元体制の国内的表現としてブルジョア民主主義的に解体し再編されたこと、そしてとりわけ（かつての、富国強兵、以来の軍事的政治的強靱性にとつてかわつた）軍事の独特の政治的脆弱性である。

前者については、むろん形相をかえて広汎に復活している、とはいえず未だに、戦前型のように権力中心に社会的根底からの求心性をもったものにはほど遠いし永続世界革命に対決するという対外的困難の中においてみると、いっそうである。われわれはなによりも日帝の敗戦が単純にアメリカ帝国主義に敗れたのではなく、中国革命戦争によつてうち破られたことを忘れておくべきではない。日帝は決してそれを忘れてはいない。日本の「戦後」はこの二つの側面の拮抗をめぐりては理解することができない。後者は「戦後」革命の敗北とともに隔離され、陰弊され、いま一つの側面、前者と米帝ヘゲモニー敗戦処理、米帝一元体制への編入が「戦後」日帝を主要に規定してきた。これは米帝国際反革命の出発点である。だがいまや擬制的「戦後」は終りを告げる。

「戦後」アメリカ的な「平和と民主主義」のイデオロギーが国民的基調となり、かつ制度的に実体化された。「戦後」革命敗北後の運動もこの中から生まれ一方の極にその場葉であるラディカリズムを形成してきた。今日、それは広汎に蚕食され、形骸化されたとはいえ、なお残命しており、とくにラディカリズムに主導されるとき人民大衆の戦闘的形成的一過程として生命力をもつ。これの形成根拠は当時の国際的な「共産主義運動」の基調が反ファシズムにとどめられたこと、日本においては中国革命戦争の対日帝勝利と米帝の対日帝勝利とが拮抗しつつ、而後者のヘゲモニーが確立したことにもとづく。しかも日帝の敗北をとらえ、しかも積極的に敗北を闘いつつて革命を組織しようとする運動の戦争中のかいめつにもとづく日帝敗北におけるプロレタリア人民ヘゲモニーの絶無のゆえに、中国革命戦争への敗北は帝国主義民族としての国民的規模の挫折・解体であり、同時に米帝への敗北もたんに帝国主義政府・軍隊の敗北ではなく総力戦としての国民的規模の挫折・解体である。後者のヘゲモニーで日帝が新しい型の帝国主義として再編の道を歩んだことの政治的理想的表現が「戦後民主主義」である。したがってこれは直接に国内階級闘争のみならず国際階級闘争に規定され、日帝の復活、膨張し世界的権力要素としての登場に應じて両極にひき裂かれる。米帝体制を帝国主義的につくすずして今日の世界的条件のもとに帝国主義的民族として登場しうるには、対米帝敗北ばかりでなく中国革命戦争への敗北をのりこえた質をもたなければならぬ。加えて、四半世紀前の自己の敗北だけではなく、最近の米帝のアジア革命への敗退をのりこえる総括者として登場しなければならぬ。

こののりこえはかつての挫折と解体の国民性に対応して帝国主義ブルジョアジーと国家権力の全面的ヘゲモニーのもと、「ラディカルに」全国民的規模でなされてはじめて可能である。要するに、帝国主義戦争を通して米帝が再分割をおし進めて得た圧倒的に覇権的地位に立脚して国内統合をつくりだし、反共とナショナリズム、侵略と反革命を統一しえた国家統合ほどの強靱さは日帝の「戦後」国内体制のなしくずし延長には望みえない。かつ、米帝国際反革命の敗北という世界的転回の現状にあっては、かつて米帝反革命を可能としたがいまやつきやされるに至ったアメリカ的國家統合を決定的に上まわる——「揚」した日帝の侵略・反革命國家態勢が必要である。この意味で、二重、三重に日帝は困難であり、未確立である。第二の軍事的政治的脆弱性とはまさに第一のこの特殊の一環である。それは敗戦のありように規定されたきわめて日本の

特殊性である。いま日帝が、物理的な意味での軍事力が弱い、少くともその核となる職業的軍隊が弱いということではない（かつて米帝によって武装解除された一時期にそうであったとはいえず）。物理力としての軍事力は「戦前」戦力をはるかに上まわるものとして確実に復活し、一貫して増大してきた。今日三次防衛四次防として両策、進行しているのは侵略・反革命突出用のものであり、いつでも核武装―核戦略を独自にとりうる強大な潜在力は現存している。しかも「平時」だけでなく「戦時」にも一挙的「戦時」にも備える全機構的「動員力」を備えつつある。にもかかわらずなお、国家的統合に占める軍隊の地位は低く、国民的承認はよわい。国家的威信、帝國主義民族の冠たるほこりの中心に確立されてはいない。それは、かつてのナポレオン軍隊のごとき力も戦中「戦後」の米帝軍のごとき戦争目的との一体性をもった国家への求心性をもたない。要するに、周縁はことごとく手をうったし、手をうち続けてはいるが、軍事に関する帝國主義ブルジョアジーの政治的中央突破は未だしなのである。一言でいえば、物理力を物理力以上に発動させうる戦争の根本理由、死をとじてする国家への忠誠基軸、建軍の基本思想が未確立なのである。このままでは、強靱な革命戦争との最前線をになうものとはなりえない。ここで言及はこれにとどめる。

こうした対外、国内困難を、最も侵略・反革命への発動がかかった現時機に、歴史的に累積され濃縮されたものの「解決」として問われている。

このことからして、日帝の如上のりこえは、あらゆる諸力を動員してきわめて強権的に暴力的にデマゴギッシュに反革命帝國主義専制に国家形態を転化することによってなしとげられる。それはなしくずしに進行しつつ対外危機の急転回に規定されて次第に一挙性を強制され自らそれに挑むといわねばならない。これは米帝の死闘である。これに対決しうるにはプロレタリア革命派もまた自己の擬制的「戦後」を永続世界革命の実践的見地になつてのりこえるのでなければならぬ。

このことが眼目である。アメリカにしてからが再編国内統合の基調はそうである。米帝は未だ広大な勢力圏をもっており、大後方をもってそれにとりかかる。

日帝はそうではない。存命のためには、死にものぐるいで侵略・反革命するのであり、それをなしとげる国内反革命はむしろ先行的に必死の命がけの飛躍としてかけられる。それはすでに始められてきたが、とりわけアジア革命においあげられて急激な展開を予測させる。日帝ブルジョアジー本流にとつて、国際性と国内性の連関はそのようなものである。だからこそ、われわれは国際性をふまえ、国際性に依拠しバネとして、ブルジョアジーにまさる、革命的国際的攻勢を国内のそれに転形し、

先制をもつて応えることが眼目となる。対外危機―国内危機における日帝の命がけの飛躍を革命勢力保存をもつて見すごし日帝の再度の革命戦争による敗北を革命の時機と見定めようとするのは待機主義的敗北主義である。すなわち、反革命専制国家形態は旧いファシズムであろうと歴史的にもつと新たな形態であろうと、革命勢力の暴力的根絶、民主主義の圧殺に立脚することは確実であり、このもとでわれわれが日帝の敗北をとらえて革命の主体形成することは不可能だからである。あるいは日帝を敗戦においこむアジアの革命戦争がそのまま主力となつて日帝打倒に連続するとすれば、それは幾度も同一類型の歴史パターンをくりかえしてのちにありうる可能性だが、それを歴史の悲惨であり、日帝打倒の主力に国際的革命攻撃の実際の援助をうけて日本プロレタリアート人民が自力更生で成長することなく、解放の主体者ではなく解放の対象におしとどまるということになる。いやしくも、共産主義の創出にむかうという窮極の任務をもつわれわれがこのような形でしかプロレタリア独裁に至りえぬとすれば、あまりにも惨めな受動的展望である。共産主義創出の政治革命は、人間の社会的解放を自ら闘いとらうるための政治的解放してうけとめなければならぬ。

とまれ、先制的国内性を革命主体がわがものとするべき死闘局面への移行とは、対外危機を外からおいあげる革命戦争、革命的労働者国家の闘いとの不均衡・不均等を、対外危機を自ら主動的にきりひらくことによつて、国内危機の激成と同時にそれに対決する革命派の戦列をきたえぬいて克服せねばならない。

ここで革命の外からの攻勢と帝國主義階級攻防の連関について誤つた見解を批判しておかねばならない。第一に、日帝の困難性から、日帝は侵略・反革命できないと直ちに結論し、そこに革命を展望する見地。これは現に進行している事態を見落し、それと対決しその矛盾をつくことによつて死闘に備える任務からそらせるものである。第二にその改良主義的垂流。

「米中接近」をさわぎたて、それゆえ「日中接近」を求める見地。これは日帝に対する政策転換の要求・願望・説教路線である。だが日中接近は日「韓」台連命共同体の内外からの革命的破壊にもつとく日朝中の革命的結合か、日帝の日「韓」台連命共同体の確立による対中反革命の強制としての「日中接近」としてのみありうる。それ以外のものは、日帝の過渡的な息つきとしてのみある。

われわれが絶対にあばかねばならないのは、今日の世界革命の前進、国際階級闘争による日本階級闘争に対する拘束性というものを、国内の階級的平和共存、革命の平和的議会的形態という立場の根拠とする日和見主義である。これは八外Vの革命の前進をもつばら受動的に八内Vの前進に結びつけようかのように考えて、歴史的に革命を流産させてきたものである。帝國

主義権力は今日の革命戦争・革命的労働者国家の(八外)からの革命的おひあげで自動崩壊しないし、牙をぬかれない。革命の永続性はプロレタリア革命党を核心とする帝国主義国革命主体への永続性をもってうけとめられ、それが対決する帝国主義は困難な(八外)への道をもつともドラスタックに(八内)の反革命的結着から突破、再編しようとするものである。

さて、具体的焦点はどうか。

#### 日「韓」台連命共同体の革命的破壊を促進せよ

米帝の追撃における台湾問題の位置はすでにみた。ニクソンがうつ訪中のベトナム・その破壊と今秋国連総会は、ヴェトナムの勝利とともに中国革命の対米帝勝利を急速につめる。これは日帝の侵略・反革命の要たる日「韓」台連命共同体に深刻な動揺をもちこむ。

日本は台湾を自己の勢力圏として放棄することはできない。ここで進行し、貫徹する論理は、ヴェトナム革命と結合した中国革命が台湾からの米帝撤退・内政干渉排除を決定づけ、台湾内の革命的人民を組織しつつ日帝との対決を正面におしたて蔣政権を末路におこむ。一方、日帝は孤立した蔣政権と結びもつばら反革命にのりだしていつそ勢力圏の確保に存命をかける。これは世界革命の一つの新たな焦点である。この発展テンポはどのようなものかほまえてきめることはできない。また、ソ連をはじめ他の世界の権力要素がどのようにからみあうか確定的に見通すことはできない。主要なことは、日本のプロレタリア人民が、この方向にひた走る日帝の今日の路線に対して、問題のつまりの当初にどのような打撃と混乱を与える力として登場するかが決定的なのである。

中国革命と日帝の「戦争」は復活した。かつての中国革命―日本革命の永続性を断った米帝はヴェトナム革命におひあげられて後退し、その結果はるかに高度化し拡大した内実をもって中国革命―日本帝国主義の「戦争」がラセン的に回帰した。それは台湾問題を尖端として、「戦後」封じこめられたアジア―日本革命の永続性の復活であり、かつ、直接に朝鮮半島に運動する。

日本プロレタリアートは、この「戦争」で革命の条件を形成せねばならない。新しい出発点はひらかれている。日「韓」台連命共同体による日帝の伸長か、その革命的破壊による革命か。

なによりもわれわれは進行している事態に明瞭な態度をとる必要がある。あいまいさこそ前進を阻んでいる。

#### 中華人民共和国の承認、「日台条約」はじめ日台関係の一切の破棄。

これは中国革命戦争への日帝の敗北に対する、ひきのばされた総括の一步であり、日本人民の「戦後」の清算である。アジアの革命的人民とともに、日中・日台問題を政治の中心にすえないようでは、日帝の侵略、反革命との対決を空語化するものである。この方向を素通りすることは、日帝打倒にむけての世界プロレタリア人民の闘争焦点から日本人民をかくりし、国際的な戦線の有力な一環になりえないだけでなく攪乱し、プロレタリアートのヘゲモニーによる国論二分と日帝政府の孤立化を妨げるものである。

日本プロレタリア人民がかかる「戦後性」にとどまるかぎり、日帝は自己の反革命的実体の総括を進め、日帝の敗戦を歴史的な、息つき、にとどめて、侵略・反革命態勢をうち固めるだろう。

この点に関する革命的左翼の具体的な鮮明さこそ要求される。すなわち、革命的左翼こそが、日本の革命と日中―日台問題を結びつけ、当面する政治闘争として進めることが、日帝の陥っている難関を全国民危機としゆく必須の条件なのである。この問題に革命的左翼が明瞭な実践的登場をなしえないとするなら、日本革命的左翼は日本革命の国際性を全く具体的につかんでおらず、その「国際主義」は世界プロレタリア人民の自身の解放闘争と結合せず、それが必然的にもたらしかつ要請する援助にも応えず、歴史的に確立され、もちこたえられ、なお前進しようとする革命の外をさまようものといわねばならない。こうした自己の小ブルジョアの無自覚的「戦後性」を清算することが三〇年代以来の世界革命の最良の潮流と結びつく資質をかくとくすることであり、しかもこれら最良の潮流が依拠する直接の基盤が旧植民地・半植民地であるがゆえの「限界」をこえてゆく一步なのである。日本の革命的左翼が自己を革命してはじめて、この問題での革命的左翼の革命的装いをもった小ブルジョア左派からきりとり、はるかに広汎にかくとくし革命化の一步をふみだしうる。日中・日台問題が国際国内的に激動をよぶいまこそ、本来の革命的左翼として人民の前に登場しなければならぬ。

ブルジョア反主流や議会議会的改良の諸党が、自己の階級的利益を守り伸長する立場から世界プロレタリア人民の革命攻勢をいかにかわしつつ日帝を延命させるかに腐心し、日中・日台問題を占有している状況は、革命の世界的前進と日本革命主体の立遅れとの不均衡の一典型を示す。ここに主体的危機はあらわにされている。われわれはのりこえなければならぬ。更なる闘いの方向・スローガンの明瞭化は、実際に実践の試練の中でこそかくとくされるであろう。

また、われわれは日「韓」問題を日台問題とたかく結びつけ、同質の見地からこれに臨まねばならない。

日帝の沖繩侵略反革命基地化阻止・日米共同反革命中樞粉碎、沖繩「返還」協定批准実力阻止／  
自衛隊沖繩派遣阻止、四次防粉砕、帝國主義軍隊解体

新たな國際的地平に依拠し、それを日本革命闘争に還流させつつ、沖繩―叛軍闘争を進めることができる。当面の攻防の焦点は、沖繩「返還」協定批准阻止―自衛隊沖繩派遣阻止である。

ブルジョア「反対派の「日中接近」(それはブルジョア「内部」の矛盾のあらわれであり、われわれはそれを拡大しなければならぬ)」の階級的性格は、彼らの沖繩「返還」への態度にあますところなくバクロされている。彼らは沖繩に対する日帝ヘゲモニーの全的奪還を望み推進している。議会主義的小ブル諸党も、口先きではともかく実際には同様である。彼らは沖繩をめぐる日帝侵略・反革命強化との対決を棚上げし「日中交回復」を要求することで闘いの焦点をぼかしている。これは世界の革命的前進を日本革命に永続させるのを断ちきる改良的防衛の見地である。彼らは世界の最下層の決起に恐怖し、日本で思いきって大衆がたちあがることを憎悪している。

だから、革命的左翼は日中・日台問題ではなく沖繩闘争を、とする見地は半分だけ中途半端の革命性である。小ブル諸党の切斷の論理にたいして、革命的左翼は断乎たる一体化と統一の推進の論理にもとづくべきなのである。

沖繩闘争もまた、今日の革命の永続性の焦点である。それは米帝支配にたいする対決、追撃を経て、それと連続的複合的に一体となって日帝との正面対決に至っている。様々の侵略・反革命活動、その増強にたいし本土・沖繩人民と在沖革命的米軍兵士の連帯をもって闘い、「返還」策動と同時的な現地抑圧のあらゆるあらわれと闘い、当面の正面対決を、あげて「返還」協定批准阻止におかねばならない。米帝を一掃し日帝の攻撃とヘゲモニー確立を永続的に阻止する本上プロレタリア人民の義務が明瞭に果たされゆく中で、真に連帯する沖繩住民の革命的自主決定がなされるであろう。

沖繩「返還」批准阻止の中で、われわれは自衛隊沖繩派遣と闘う態勢を確立しなければならない。これは帝國主義軍隊解体をめざすわれわれが始めてそうぐうする自衛隊をめぐる政治的大会戦である。われわれはかつての小ブル的反再軍備闘争とその延長たる「自衛隊反対闘争」、軍事的改良主義を一掃して、ぜひともプロレタリア革命派のやり方で闘うことを問われる。

自衛隊は国内反革命の巨大な物理力の凝結である。革命―武装蜂起はこれを解体することなしに貫徹しない。だがそれは、現時機から武装蜂起への過程にあつても、蜂起の時機にあつても、政治的かつ軍事的な解体―せんめつという姿をとる。われわれは、ものごとを一面的に固定化し、対立物を静止した状態でとらえて全局にひきまばすべきではない。対立物の様々の契

機からする衝突・相互浸透・移動と発展の見地になつた。軍事的対決の発展に一元化すること、あるいはたんなる政治工作の延長に軍隊革命を展望すること、この両極の一面化と闘う。

帝國主義軍隊解体―(狭義の)叛軍闘争は、すぐれて國際的である。米帝軍解体は最近のもっとも典型的な革命現象の一つである。革命戦争を圧殺するべくして革命と八出会うことをもってそれは促進された。それはヴェトナム革命・米軍内・米国内闘争によって追撃されている。そして、日帝軍解体へと発展・転化・永続されうるし、そうしなければならぬ。日帝軍が直接に對外侵略・反革命と八出会うことによつてではなく、そこまで待つのではなく、侵略・反革命態勢構築過程でそれと闘う日本プロレタリア人民とそうぐうすることを通して、個々の自衛隊兵士にかかわって、世界と日本の革命と反革命が生きた闘いとして襲い、自衛隊をまきこみ、政治日常工作ばかりでなく、政治的に、軍事的に衝突することをもって反革命の物理力の中心に、階級闘争を革命的政治を不斷にもちこむことによつて。

沖繩自衛隊派遣は外に對する日帝軍事要索化であり、内には對しては軍事的政治的脆弱性克服の一大中樞突破である。これとの対決を、自衛隊兵士を固定的に敵として根柢不明のテロルをすることなどとして始めるのでは絶対なくて、思いきって大衆をたちあがらせる政治的大会戦とその軍事的貫徹力を組織することによつてむかえうち、この対抗を自衛隊内に投げこみ、權造化する、われわれの中樞突破の一里塚とすべきである。(なお、沖繩―叛軍闘争については、『革命軍創出・帝國主義軍隊解体と沖繩闘争』「構造」七一年五月号参照)

日帝との闘いの政治的焦点をかく設定し、三里塚決戦からおいあげ、入管闘争基地闘争、中小企業労働者の闘い、公害闘争等諸々の戦線を強め、破防法体制をつき破つて進もうとするとき、われわれは佐藤政府打倒を重要な闘争目標の帰結とするべきである。

(道)政府は秋の国会に沖繩「返還」関連国内法として「米軍の基地継続使用に関する暫定措置法案」「自衛隊の沖繩派遣に伴う自衛隊設置法改正案」を提案する。

前者は沖繩の基地を拒む地主に三―五年間は土地収用にたいする不服申立て権利を停止し強制発動するものである。われわれは後者―自衛隊増員計画粉砕とともに、この暫定措置法を現地住民と一体となって実力阻止し、「返還」批准及び基地継続使用に痛打をあげせねばならない。

### Ⅲ 佐藤政府を倒せ！

〈佐藤政府打倒の要因は出そろっている〉

⑩ 佐藤政府を倒せ！この闘いは現時機の革命の世界的攻勢を日本人民が日帝に対する攻撃に転化しゆく第一歩であり、侵略・抑圧・反革命との全線での闘いを挙げてここに集中しなければならぬ。思いきって大衆をたちあがらせ、できるだけプロレタリア・ヘゲモニーを拡大し、プロレタリア人民大衆の闘いで佐藤政府を倒せ！当面このように実践的態度を明瞭にして臨むことは、革命的左翼の最低の義務であると私は確信する。

佐藤政府を倒す要因はすでに多すぎるほどある。国際的な革命による攻撃、日帝の侵略、反革命に集中する困難についてはすでにみたところである。これらは当面、政府の危機に収斂する。積年の公害・物価・住宅問題は根源的な解決を求めて、下層人民の不満の爆発を秘めている。医療における人民抑圧政策は新たな不信をよびおこした。農民の持続的な離反は続いている。決して帝国主義的「労働運動」に包括されない下層プロレタリアの独自の登場は始まっている。なによりも、三里塚をはじめ頑強な闘争拠点は堅持され、非妥協の闘争の爆発はせまっている。沖繩住民は「返還」の正体を見ぬき、本土の闘いと結合して新たな攻撃に烽火をあげるであろう。こうした闘いの持続、広がる不信の中で、一方で議会的危機が進行している。ブルジョアジー内部に日帝の二つの路線をめぐる争いに収斂し、自民党内抗争は単なる派閥争いの次元をこえ、野党をまきこみ、結ぶ形でなされている。参議員改選問題―参院議長達に見る政府の破綻、日中議連―日中国交回復決議案をめぐる政府の苦境、これらを佐藤退陣に結びつける動きは顕著である。

ただ一つだけ明瞭でないものがある。日本の革命的左翼が、当面の焦点として佐藤政府打倒を大胆に提起していないことである。これは日中・日台問題に対すると同様、露骨に召還主義的誤りである。

佐藤政府は水ぎわにおいつめられている。佐藤政府を水の中に落とせ、そして、水に落ちた犬をたたけ、徹底的にたたきのめせ！われわれは当然にもこうしなければならないはずである。

われわれはつねに、現在のプロレタリア人民の闘争を帝国主義政府打倒にむける。それはプロレタリア革命権力樹立にむけるといふことの別の側面である。日帝打倒・臨時革命政府樹立をめざして現在の闘うものは、その未来からみれば小さいが、それにむけて避けることのできない「予行演習」として、佐藤政府打倒に進まねばならない。

人民が政府を倒すという最も広大な政治領域が、政局の動向、議会内闘争、せいぜいよくて議会への圧力にとじこめられ低く、せまい枠に、現政府をめぐる闘いが局限されているところに危機がある。自民党反対派や小ブルジョア野党は、当然にもこの低い、せまい政治の枠に賛成であり、それにとどまろうと、とどめようとしている。だから革命的左翼は佐藤政府打倒闘争などを提起し闘うべきではないというのは召還主義である。彼らは政治を高め、広げることには反対し、そうすることによって人民の思いきったたちあがりやを妨げている。今日の広汎な流動の中でそれにきりこみ政治の高度化をなさないこのような傾向をきびしく拒否し、革命的左翼の体質的欠陥を克服することはさしせまった急務である。

〈佐藤政府を人民の力で倒すことは革命にとって有意義であり、いま可能であり必要である〉

⑪ 日本の革命的左翼が日帝の侵略・反革命・抑圧と闘ってきたこの六年有余は、すべて佐藤政府との対決であった。佐藤政府は侵略・反革命の最も強固な完成された体現者であり、その路線を推進し、路線を妨げるものを苛酷に弾圧してきた。日本の革命的左翼にかぎってみても、佐藤政府は何人も革命家を殺し、多数を不具者にし無数の人間を傷つけ、のべ何万人を逮捕・投獄し、数千人を起訴してきた。これは更に拡大・強化されようとしている。佐藤政府は革命的左翼と闘って日本帝国主義政治を内外にわたってきたえてきた持続的に密集する反革命である。革命的左翼との対決、それへの弾圧は、日本階級闘争の尖端の一部、しかし日帝路線の成否をにぎる核心であった。だからこそ佐藤政府は、革命的左翼の存在そのものの圧殺を意図して組織破防法の引きがねをひこうとしている。水際にたちながら必死になって完遂しようとする残された使命は、その侵略・反革命路線のために、沖繩問題の帝国主義的結着を突破口に帝国主義軍隊の威信を闘いとること、台湾を死守し日「韓」台運命共同体を固めてアジア革命と対決する路線と体制を確立すること、そして革命的左翼を暴力的に根絶しそれをもって体制内反対派を去勢すること、である。これをなしとげて、佐藤はこの路線の継承者に安全に政権をひきつごうとしている。だからわれわれは、これら一個全体の闘いをあげて佐藤政府との対決に収斂させ、侵略・反革命展開に最初の破綻から持続的な泥沼化に道をひらき、「左」右の路線継承者に一貫して手詰りをのみおしあげ、佐藤政府のもときわめて求心的に機能した

公安政治警察・機動隊をはじめとする警察・検察・司法・軍隊等暴力装置に混乱と解体をもちこまねばならない。

われわれは、日帝打倒を空疎に叫ぶのでないかぎり、その主要な攻撃と闘い、闘いを抑圧する諸暴力装置と闘う。しかしつねにその暴力装置に対する実体的指揮者であり、ブルジョアジーの政治的統括者である、具体的人格をもって構成されている現政府と闘う。日本の革命的左翼は、革命に不可分の革命的憎悪を闘争現場の直接の敵ばかりでなく、それ以上に最大最強の元凶に対してむけるべきである。なぜ佐藤政府そのものに対しては宥和的であるのか。現政府との闘争は様々の階級闘争の段階で一定の状況下で、政府打倒闘争としてつらぬかれるべきである。われわれは階級闘争を推進するだけでなく、それをプロレタリアート独裁に転化することを目指す。そうである以上、われわれが全人民的規模で政府問題をめぐって闘争するという最も広大な政治の領域にプロレタリア人民をふみこまじめ、できるだけ強力な人民の闘争、プロレタリア・ヘゲモニーの投入によって現政府を打倒することは、革命情勢下で政府を打倒し臨時革命政府をうちたてるための、見逃がしえない実践的訓練なのである。

帝国主義的現政府を主要な敵として攻撃を集中してはならない場合とは、もっとも主要な敵、主要な危険が政府およびその勢力とは別の反革命政治的勢力として存在し、政府を倒すことがその反革命を増強させ、革命を破壊することになる場合だけである。だが、いま主敵は明瞭に佐藤政府とその勢力である。人民をたちあがらせ、佐藤政府を打倒し路線を破綻させ、次のより混乱した状況であらわれる敵と永続的に対決する——これが追求されるべきリアルな革命的政治の論理である。追いつめられた当面の主敵を打倒しようともせず、あれこれ次の展望を語ること——これは机上の空論である。

政府打倒闘争に未来のプロレタリア権力が萌芽するということは現在の人民の力によってもたらされる権力中樞の変動を通してつねに日帝の破綻の促進、日帝への打撃の加重と同時に人民の革命的前進・結束の強化を具体的にもたらすという二側面を充たすべく提起することである。政府打倒をふまえてわれわれはさらに革命の前方に進まなければ無意味だからである。

われわれは佐藤政府打倒を即帝国主義国家権力打倒・臨時革命政府樹立として提起し、展望することはできない。われわれはまだ階級闘争の全局にプロレタリア・ヘゲモニーを貫徹しきれないからである。だからといって議会内政局の動向にこの問題をとりこめることは犯罪的である。われわれの目標と展望ははっきりしている。プロレタリア人民のできるだけ大きな関与をもって侵略・反革命路線と対決し、これをにやぶってきた佐藤政府の最後の使命遂行に實際的打撃を与え、侵略・反革命遂行とそのための安定した政権交替・維持そのものに持続した混乱の突破口を佐藤打倒からきりひろくことである。人民の力に上

る佐藤政府打倒は、帝国主義権力主流と反主流の争闘を激化させるばかりでなく、権力主流の内部に分裂と闘争をもちこみ、侵略・反革命、総じて日帝の総路線をめぐる根本からの争い、それをにやぶ勢力とその組みあわせの根底的再編が不可避となるであろう。このような状況をいわば外在的ではなく、人民大衆の主体的な力でかちとることが人民自身の政治生活の高度化という経験の媒介による日帝・支配階級からの根こそぎの、不可逆の離反の始まりなのであり、革命的左翼自身が計画的に導かなければならない革命的左翼の戦列の再編・前進、共産主義と人民大衆の結合の条件なのである。佐藤政府打倒は、日帝が確実に今までのやり方で支配することを困難にする状況を一挙にはないまでも次第に追いあげるであろう、しかも今までのやり方で支配されることを拒否する人民の革命的左翼との結合を決定的に促進するであろう。われわれはこのようにして六九年の敗北から立ち上るであろう、このようにして国際的な革命の前進を日本国内に確実に転化するであろう。

佐藤政府を倒して佐藤並流・福田がたつか、自民党内混成野合政府となるか、反主流がたつか、反主流が分裂するか、反主流と野党との連合がなるか、その連合に代々木がはいるかどうか、様々の次の局面が考えられる。すべてこうしたことはいまはどうでもよい。はっきりしていることは、人民の力で佐藤政府を倒すことと、人民の力が関与せぬまま議会的茶番のやりとりで佐藤の安定した後継者がきまる、あるいは前記のどれかにおちつくことは、決定的にちがうことである。人民の力で佐藤政府を倒すのである以上、誰がひきつこうとすでにわれわれは強固な前進地点をきづいているのである。

佐藤政府を倒してもよりよい政府をつくれぬ、あるいはどんな政府ができるかわからないからといってしりごみするのは馬鹿げている。より追いつめられた地点でもっと密集する反革命政府が成立する（そうなる可能性を極大である）場合も、あるいは様々の様相をもった迂回や野党連合政府ができる場合も、これら右「左」の帝国主義政府をいっさい支持せず、永続的に非和解、打倒の立場で強化された人民を更に前方にたたせるプロレタリア革命派の独自性が物質力をもって貫徹されるかぎり、佐藤政府打倒を通して、革命は前進する。より大きな反動政府に恐怖したり、野党連合政府の幻想にのみこまれることを必配するものは、革命が現在の主敵を倒し、次々に立つものもやはり敵であることをバクロシ、敵を新たにしてみ進撃することを忘れてはいる。そんなものは革命を口にするのもやめてしまえ。一九一七年二月はどうであったか。

われわれは、体制内の反革命かその改良かの二つの路線をめぐる争いに、侵略・反革命かその永続的な粉砕かの二つの路線をめぐる争いを対置し、人民を後者の政治に牽引し、最後のプロレタリア・ヘゲモニー確立の基盤をダイナミックにつくりだすべきなのである。

前述の状況に立脚し、次のことを充たすならば、佐藤政府はその使命を果たして退陣するのではなく、その使命を投げだし

て倒壊する。

革命的左翼が一致して佐藤政府打倒にあらゆる闘いの力を集中すること。

人民の現状転換の欲求を革命的政治意識にたかめ、反佐藤の気分を現実の政治力に物質化すること。

小ブルジョア反政府諸党の佐藤退陣要求をバクロし、かつ、これら諸党と佐藤政府との対立を最大限に活用すること。

ブルジョアジー内部の反対派・動揺分子の動向、自民党反対派の反佐藤攻撃と動揺分子の動向を拡大し、活用すること。

第一のことが主導的である。これなくして思いきって大衆をたちあがらせることなどありえないことである。抽象的に日帝打倒を叫んで、日帝の最も危険な路線の体现者、総括者・支配者・その人格的機構的表現たる佐藤政府を倒して進路を開けと提起しないで、人民に方向を示すことはできない。革命的左翼がこの核心を素通りしているからこそ、あいまにし佐藤政府そのものへの刃をにぶらせているからこそ、人民は革命的左翼と結びつくことができず、議会議論的佐藤政府打倒や佐藤退陣要求の枠の中に自らをおしとどめているのである。

そうすることによって、政府はどうなるか、政府をどうするか、政府打倒からの展望はなにかという、一般に政治闘争の最も広大な領域を小ブルジョア諸党とブルジョアジー反対派の手に明け渡し、自ら召還してしまっているのである。今日貫ぬかれるべき基調は八沖縄返還協定批准阻止・中国の承認・佐藤政府打倒VかA批准の暴力的貫徹・台湾死守・佐藤門満退陣Vかである。それがあたかもA批准黙認・日中国交回復・反佐藤議会議論主義政府Vをめぐって現象しているところに危機がある。

この現象の虚構性は明白である。だがこの虚構性が明らかであるということから、逆にここにきりこむことが階級闘争の当面の帰結であり新たな全人民の出発点であることを理解できず、無感動、無自覚に反発し、冷笑的にとり扱い、非実践的・没主体的に「評論」することに終始するところに革命的左翼の危機がある。最近の三里塚・沖縄闘争、この日本階級闘争の最前線と、最近の国際情勢II世界革命の前進とを固く結びつけ日帝を攻撃することの具体的焦点を見失っている。われわれは、三里塚、沖縄闘争を極点までおし進め、世界革命の前進に内から応える結び目の環がなにかを、世界と日本の現実の革命闘争の動向、発展論理から徹底的に考えぬいて佐藤政府打倒の任務をおし進めねばならない。

### 〈佐藤政府打倒をめぐる諸偏向を克服せよ〉

⑫ われわれは次の諸傾向を克服していかなねばならない。

第一。佐藤政府打倒を直接に日帝打倒、臨時革命政府樹立と等置するもの、あるいは現時機の政府打倒と無関係にもつぱら

臨時革命政府を無媒介に提起するもの。

これは、一般に現在が革命的危機ではないばかりか、革命的危機に臨んで革命の帰結にまでおいつめるプロレタリア人民の最良の核と結合した指導的革命的革命党が未形成であるということからして、臨時革命政府を一貫してかくとくする方向として提起する絶対必要性はあつても、現時機の実践スローガンではない。前者は、佐藤政府打倒から始まるべき永続性を理解しない。後者は現在の主敵との闘争を忘れて抽象的な「帝國主義なるもの」と「格闘」する空論である。

第二。佐藤政府打倒を革命にあるいは臨時革命政府樹立に結果しえないから佐藤政府打倒の提起はやらないとするもの。

これは第一のものの裏返しである。われわれは、どんな政府であろうと最後の政府を打倒しつくすまでは連続的に打倒する立場を堅持し、時機をとらえて倒していくことによって（曲折をもちながらも）ラセン的に革命に接近するダイナミズムをもたなければならぬ。

第三。日帝の攻撃課題との闘争こそ重要であり、政府打倒はあまり関係がないとするもの、あるいは問題のすりかえだとするもの。

これは、階級闘争はするがプロレタリア独裁は目指さないことに窮極的には通ずる立場であり、無自覚的なアナキズムである。これは、攻撃のあらわれとの闘いと日帝の存在そのものの打倒とを結ぶ位置に政府打倒があり、政府打倒は最高の中樞突破II最も広大な政治であることを知ろうともしない。

第四。佐藤政府打倒は議会議論主義あるいは「人民戦線派」だとするもの。

これは、典型的な「左翼」小毛病である。ブルジョア議会は反革命が一扫するか革命が清算するかするまでは大なり小なり人民の動向を歪曲してうつした。革命的大衆闘争が存在しないときには、ここから亀裂を拡大すべきときすらある。だが、いま革命的闘争と人民の反政府とが巨大に結合する状況の潜在するときに、この結合を断つ役割りを議会議論主義は果たしている。この立場はこれを許す役わりしか果たさない。必要なことは、まさにこういう状況を突破し、政府問題を人民自身のものに解放し、対立の次元を高度化するために、革命的左翼が独自の仕方での領域に侵入することなのである。

第五。佐藤政府を追いつめる、とするもの。これは直截きを欠き、不徹底である。倒すためには追いつめねばならない。だが追いつめてなぜ倒してはいけないのか。倒す目標をもたないでどうしておいつめることができるか。

われわれは原則的にかつリアルに任務を設定する。

国際プロレタリア人民は急速に新しい地平をきりひらいている。米帝追撃と日帝との対決を大方向として提起している。佐

藤政府に対するあらゆる側面からの攻撃が集中している。佐藤政府は水ぎわにたつて最後の反革命的攻撃を断行しようとしている。この反革命的攻撃を粉碎する闘いをこそつよめ、かつそれを現時機においてもっとも革命的にやりとげるには、佐藤政府打倒をめざすのはあまりにも当然すぎることなのだ。そのためには独自の力を結集し、諸政治勢力間の様々の矛盾を利用して闘うべきである。

佐藤政府打倒を回避し、ブルジョア「左」派、小ブル諸党の佐藤退陣要求の単なる左翼的圧力として利用されるのか。それとも佐藤政府打倒を大胆にいきし、政府と反政府諸党諸派の対立を思うままに利用し、革命的政治の新しい地平をきりひろくのか。

共産主義的政治の回答は明瞭である。われわれはわが道を進まねばならない。

## IV 武装闘争と大衆路線を結合・発展させよ！

### 〈武装蜂起および蜂起への道〉

⑬ 世界革命闘争の新局面にふまえ、日本における当面の革命闘争任務を以上のごとく設定するとき、武装闘争と大衆路線の結合・発展が絶対に必要である。中心であろうと周縁であろうと、全体であれ部分であれ、階級的攻防の核心をはずれた武装闘争を、われわれはきびしく拒否しなければならない。最近生みだされつつある実践構造の萌芽を断乎として展開させ、武装闘争を政治闘争の貫徹力としてこそやりぬかねばならない。

日本における世界革命の当面の実現、プロレタリア権力は、世界革命戦争の一環としての武装蜂起によって樹立されるであろう。すなわち、帝国主義の侵略・反革命と対決しそれがもたらす国際国内階級危機を世界革命に導く世界革命戦争は、概して帝国主義強国の権力奪取においては、(後進国永続革命戦争とその勝利の結果という「援助」をうけた)武装蜂起という具體的形態をとる。日本のような単一の資本制社会を基盤とし、強固の帝国主義統一権力が存在している世界的権力の一中心において、われわれは中国革命がそうしたように紅色解放区を系統的に組織し依拠し、独自の核となる物質的生産基盤を確立し、解放軍を主導的な革命組織形態としそれを内包する政府権力をうちたてつつ、主導闘争形態を軍事的戦闘に直接の戦争形態として進むことはできない。これに関するベダンチックな幻想はいっさい拒否すべきである。革命の国際性ということは、後進国と同様に帝国主義国でも国内革命戦争をもって権力奪取にむかうのではない。また、国内革命戦争に外から国境をこえて進撃する永続革命戦争が結合するという展望でも、外から進撃する革命戦争が国内革命戦争をもって戦場を帝国主義国家権力を倒すということでもない。世界革命戦争は、帝国主義強国に対する周縁からの永続革命戦争をもって戦場を帝国主義国家権力を倒すという中心におしあげ、世界革命が奪取すべき最も主要な敵の要素に対する結着を帝国主義国における武装蜂起に求めている。これが少くとも当面の眼目である。われわれは国際性をこのようにつかまねばならない。そして、帝国主義国の革命は国際階級闘争に拘束されながらも、独自に、武装蜂起形態が必然である。

国際性は一国的特殊性を通して発現する。われわれの直面する武装蜂起とそれへの道は、古典的な一国的なプロレタリア

革命蜂起が、永続革命戦争のきり開いた地中で帝国主義国プロレタリア人民が主力となって世界的権力に大反攻するという、より発展した武装蜂起としてとらえることができる。基本的にはわれわれの戦争、内乱は、一挙的集中的武装闘争である武装蜂起に凝縮する。それは地方的部分的権力分割から始まって中央権力を奪取することができないことにもとづくものであり、中央権力の統治能力の破壊をそのような仕方でも追求できないことにもとづいている。最後まで統一中央権力としてとどまるものの密集する反革命の思想的政治的統合力の減退、反革命軍事の破綻を、革命と反革命が恒常的に衝突・接觸・相互浸透し、地域的に交錯・混屯することを通して事実上の対抗独裁権力の形成・対置によってのみ決定づけられ、その最後の結着行為を武装蜂起に求めることである。

われわれは帝国主義国の武装蜂起にあらわれるわれわれの革命戦争の短期性・一挙性は、歴史的に闘いとられてきた後進国永続革命戦争の長期性・持続性との単純な現象的差異や対比でとらえるのではなく、複合的永続的一体性においてとらえる。それは世界革命そのものが既述のような複合的永続性をもっていることの軍事におけるあらわれである。「後進国」の革命戦争は世界的権力としての帝国主義をうちやぶってきた。帝国主義は永続革命戦争の長期をかけて危機をもたられ、武装蜂起の一挙性によってうちやぶられる。われわれの蜂起の特質は単に一国的特殊性からだけではなく、永続革命戦争に敗北し包囲された世界的権力における革命形態の特殊性として総合されるであろう。また次の点は戦略的に極めて重要である。われわれが帝国主義の侵略・反革命と内外から対決して蜂起にむかうとき、それは帝国主義相互間の反革命干渉を制して進むということである。帝国主義国における、蜂起の結果にたいしてばかりでなく蜂起への過程に対する他帝国主義の反革命干渉、とくに軍事的介入は帝国主義強国間の国際反革命同盟の当然の任務である。もともとこれをなしきることによって成立した。だが永続革命戦争への敗北あるいは新たにそれに直面するという困難のもので、いまの国家権力の態勢のままでは、他の帝国主義強国の革命に反革命軍事介入を決定的な有効性をもって行うことは著るしく困難である。具体的にいうと、ヴェトナム革命戦争に敗北した米帝が日本革命に対して有力な反革命軍事干渉をなしうるには、またその逆の関係が成りたつには、米帝も日帝も反革命専制国家形態を確立しているでなければ、ありえないことではないとしても著るしい困難をもち、かつそのこと自体が自国の足下から爆発的な危機をよびおこす。われわれは、反革命同盟の機能を固定的に不変の要素と考えてこれを粉砕し、制し不能に陥れて革命にむかうことをせず、帝国主義強国相互の反革命軍事干渉を帝国主義国の革命にたいする決定的な反革命要因とみなして、帝国主義国における敵中樞権力打倒なき世界革命戦争論やとくに主観的な日米同時蜂起の図式をもてあそぶべきではない。世界革命の各国の発展は不均等不均衡である。帝国主義国間でもそうである。にもかかわらず、危

機の同時性は各国革命を連続させる。日本革命にたいする米帝の反革命介入は、日帝の国家権力以上の幻想性と暴力的力能をもって行なわれてはじめて意味があるが、それはアメリカ人民の未だ革命をやりとげえないが他国革命への干渉に反対する力でも内部からも粉砕あるいは制動されるであろう。日本革命の樹立とかかる米国内人民の力の強化は、アメリカ革命へのインパクトである。この関係は逆にしてもまた成立する。反革命同盟は、帝国主義国人民が後進国革命戦争、革命的労働者国家と密集し統一した革命的進撃のまえには、機能の分解と解体におこまれる、これがわれわれの依拠しうる革命と反革命の世界的拮抗の論理である。(いまひとつ、ソ連社会帝国主義の帝国主義国革命への反革命軍事介入は、少くともアジアでは中国の革命的制肘が決定的である)。以上から出てくる実践上の結論は、帝国主義における革命が国際性の凝縮にもかかわらず、日本プロレタリア人民の対決する直接の暴力は、日帝の国家権力暴力装置・軍事的に編成された私兵であり、その対決形態は武装蜂起だということである。革命の国際的攻勢において、窮極には、かえって国内階級闘争結着の条件は純化されるのである。こうしてわれわれは日本の武装蜂起を展望できる。確立した日本プロレタリア権力が他の革命的労働者国家といっしょになつて、他の帝国主義強国やソ連社会帝国主義、諸反動政権にむかつてどのように世界革命を進めるべきか、このことは闘いとられるであろうこの地平に依拠して決めることであつて、いまから不測の、ただ経験によってのみ解決能力を附与される問題にあれこれ展望を語る必要はない。

むろん武装蜂起を一挙性という特質においてとらえるとしても、それ自体は革命危機―情勢において一定の連続性を想定しうる。革命情勢を生みだす蜂起と革命情勢を決定づける蜂起というふうな。この特殊の連続性は、しかし、人民戦争における最終の大反攻と都市の奪取とに対応するものであり、蜂起局面以前に不当に拡大解釈することはできない。また、われわれはおそらく「古典的」な革命発展諸段階の蜂起とは異つた移行過程を予測しうる。なぜなら、革命・反革命の国際的拮抗は、主体にも客体にも拘束して作用するからであり、それは「戦後」の政治過程をおしてはかりうる。とはいえ、事態をのっぺらばうの慢性的危機としてとらえることはできないのであつて、レーニンのいう、全国民的危機、の持続的形成の過程と全国民的危機そのものは明瞭に区別されねばならない。われわれは全国民的危機―直接の蜂起局面を革命的人民にとっての外在的衝撃としてではなく、持続的形成―蜂起態勢の構築として推進する。ここに永続革命戦争においあげられて侵略・反革命再編のための反革命専制国家形態をめざす攻撃をめぐって革命的危機が生じ、革命戦争と結合して蜂起にむかひうるわれわれの位置がある。

われわれのなすべき蜂起は、全国民的規模の「内乱」の試練に耐え、全人民の根底をもち市民社会を深部から解体して起る

あがる巨万の人民の蜂起である。なぜならプロタリア独裁をめざすわれわれの蜂起は、日帝が反革命専制国家形態を市民社会の深部に至る階級関係の政治的軍事的再編としてかける攻撃を粉砕するものとしてのみ成功的にありうるからである。どんな蜂起もクーデタ的、陰謀的側面をもっている。それは敵権力に対する独裁である以上当然である。だが、人民に対する反革命的強制力としてのクーデタに対し、人民の革命貫徹力としての蜂起の特質は、実際にプロタリア人民自身が蜂起の主力であるという実体にあらわれる。そうでなければ、おそらく最も深く革命と反革命に国民が活性的組織的に分裂、対抗する状況をついて革命権力をわがものにすることはできない。反革命が権力の暴力装置の枠をこえて大量に国民を政治的にのみならず、軍事的に組織するのである以上、われわれは不断に人民大衆の先制力でもって蜂起にむかわねばならない。日帝はその政治路線とそのイデオロギーで反革命暴力を組織し、われわれはかくとくさるべき党の政治路線とそのイデオロギーで革命暴力を組織する。巨万の人民蜂起は前衛党と人民大衆の革命的政治路線による結合を基礎にした、革命の運命を自分の運命とする人民の登場と人民の暴力の軍事的実体化、特殊の一環として、警察の孤立化と全人民の分裂の軍隊内投入——政治的解体かくとく、軍事的解体、殲滅による帝国主義軍隊の革命と反革命への分裂が現実的に展望されてはじめて、もつとも権威的に貫徹されるであろう。蜂起は、軍事的側面からいえば、前衛党の軍事的計画性と実体的指導性に導かれた人民大衆自身の革命的暴力・その軍事的貫徹である。大衆の暴力のこのような発現でないかぎり、蜂起は悲喜劇的にしかあらわれず、軍という敵の要塞は軍事以前に政治的に安泰であり、かりに蜂起が貫徹されたとしても、うちたてられた権力は人民の上に立つ外在的な疎外された暴力であろう。

だからわれわれ未だ直接の革命的情勢ではない現時機から、蜂起への道を次のようにいいうる。

人民を侵略・抑圧・反革命と闘う革命的政治路線に結集するべく、その現在の個別的あらわれに対し全戦線の至るところから大衆の思いきったたちがりを不断に促進すること。

蜂起局面を先どりし、蜂起する人民大衆を軍事的に媒介しかつ「革命軍」の尖端となり核となる前衛の独自の軍事体系。

かくとくされる蜂起の未来においてあらわれる前者とは不断に区別されかつ前者にむかつて一つの基礎となる現時機の決定的政治闘争はじめ大衆の闘いのすべての領域での武装闘争の貫徹。

したがって、つねに人民大衆の各戦線での決起に独自に武闘を組織し、人民大衆自身の武装闘争を促進、組織し、自然発生的な武闘を政治路線、軍事体系、当面の闘争での計画的方向づけのために闘うこと、である。

われわれは、蜂起への様々の待機主義に反対する。蜂起は必ずしも巨大な大衆の自発的戦闘、いままでも政治の圏外にいた

ような膨大な人々の自然発生的英雄主義をよびおこし、それを前方へとおしやうて進撃する。しかし、蜂起までは合法的闘争、蜂起のときに至ってこの自然発生的性と結合した蜂起準備および蜂起、という見地に反対する。またもつぱら自然発生的蜂起に結びつくべく前衛の思想・政治・軍事の密教的準備という見地に反対する。これらはいずれも、蜂起は、人民が帝国主義国家権力および資本主義に対する自己の闘いの経験を紹介して思想的政治的のみならず軍事的にもきたえぬかれることなしに不可能なことを忘れており、前衛の党的形成および前衛と人民との結合もまた同様であることを忘れている。

一方でわれわれは、戦争発展論、ゲリラ発展論としての蜂起への道に反対する。軍事に一元化することで、蜂起が構成されるのではないからである。

だからわれわれは、根底的敗北を喫するのではないかぎり、部分的一時的敗北をおそれて武装闘争を回避することはできない。根底的敗北とは革命的左翼が、非合法化され、一切の公然たる活動の合法的条件をうしなうことから始まる。われわれは破防法・組織破防法との闘争、組織破防法攻撃をつねに封殺しつつ蜂起への道を歩まねばならぬ。組織破防法適用は、権力にあって革命的左翼の存在そのものから圧殺して反革命専制に至る現実の巨きな一歩である。

われわれの蜂起への道の核心は、以上のように領導しうる蜂起を闘いとる党である。これは、現実の活動においては、合法と非合法、公然と非公然の生き生きとした統一である（このことは、共産主義者、その党と運動は根源的に資本主義と敵対するがゆえの本質的非合法性とは区別されるのは当然である）。どんなに長く非合法存在を強いられた党でも、非合法性をつき破り、最も広大な公然活動の領域に侵入し、自らの力でもって現法体系をこえる、合法性を敵権力に強制しえずして、蜂起や革命戦争を勝ちぬけた党はない。二月ソヴェト下の、コルニロフ叛乱粉砕後のボルシェヴィキ党や解放区に依拠した中国共産党はそうである。

だから、前衛を粉砕し、尖端の破壊から人民の一切の革命拠点をなくだつする深部への攻撃たる非合法化攻撃にたいして、革命の成否をかけて人民とともに反撃し、権力とのツバゼりあいには勝ちぬいて蜂起へ展望するのが革命的実践の基本的見地である。非合法化攻撃にたいして、敗北主義的に非合法化された状況に備える、完全非合法党を対置するのは絶対に日和見主義である。敵がいま犯そうとしている領域、奪おうとしている主要なとりでを闘わずして放棄して、勝ちにのった敵と対決することは著るしく困難である。これは迂回してよいような後退ではない。われわれに後退しようような後方はない。全線のかいめつに連なるような後退を自ら敢てし、技術主義的に完全非合法党の一時代を経て革命を展望することはできない。われわれは三〇年代以降の日本やナチス・ドイツのもとで革命が粉砕され、共産主義者の国内非合法活動がすべてつみとられ、決し

て主動的に敗戦―革命的危機に至りえなかつたことを想起すべきである。現代の反革命独裁とツァーリ帝制下の非合法を同列に論ずることはできない。われわれは敵が反革命の中央突破として犯そうとしている領域―奪おうとしている陣地を決して明けわたさないで、当面の闘いを進めることが眼目である。あらゆる闘いに、この非合法化―国家形態をめぐる攻撃に対する持統的勝利が追求されねばならない。だからこそわれわれは非合法、非公然の体系創出と現実的活動を断乎構築しつつ公然活動と合法性を死守し、人民をつねに大胆にたちあがらせることをもって対決する。敵の攻撃にもつばら低い次元でしか闘わなにかぎり、敵はわれわれの頭をなでて去勢させる。これは既成左翼がたどつた道である。敵のこの攻撃に、対決を高度化しつつ人民のより高度の闘いを領導し、より堅実な前衛との結合を目指す。

そのためには、敵のもっとも主要な危険であるばかりでなくもっとも弱い環、困難な状況に、大胆に人民と前衛はきりこんでいかねばならない。路線が正しく、そのもとで人民の結束が進むかぎり、非合法化攻撃はつねに挫折し、かえって危機を招く。前衛と人民との離間をめざし、離間に立脚してそれはおこなわれようとするからである。

だから、いまよりひらかれている有利な状況に、召還主義を克服して進撃し、武装闘争、大衆路線の結合、展開によって、蜂起を組織する党形成を核心とする人民の蜂起態勢をより前方におし広げること全力をあげなければならない。

### 〈武装闘争・大衆路線の結合で佐藤政府を倒せ！〉

#### 人民の革命的前進を実現し、蜂起を闘いとる党形成の地平をきりひらけ！

④ われわれはしつように大衆路線と武装闘争の結合、発展を提起してきた。これはあまりにも当然のことである。しかし、当然すぎることを、あわてずさわがず、冷静に大胆に、しつようにやり続けるこそ革命闘争の大道である。

本来、武装闘争とは大衆路線に内在するものである。共産主義運動において大衆路線なき武装闘争などありえない。前衛は武装闘争をやり人民大衆は大衆闘争をやる、前衛は非合法活動・大衆は合法活動、あるいはプロレタリア革命派は武闘路線・改良諸党は大衆路線、前衛は軍隊を作り人民は作れない―こういう図式に陥んでナルシズムにふける革命的左翼は全く笑うべきである。それは絶望的にまちがっている。

武装闘争自体は、階級闘争の機能という見地からみるかぎり、あくまで一つの闘争形態であり、手段であるにすぎない。革

命闘争のリアリズムにおいては、武装蜂起や革命戦争という最も高度の全面的に発展したものを含めて、武装闘争を運動の現在の利益ばかりでなく未来の利益をもたらずかどうか、部分ばかりでなく全局の発展たりうるかどうかの機能を価値判断基準とする。大きい小さいか、激しいか大人しいかという現象にあるのではない。たしかに、武闘が要求される時代に、なにはともあれ、大胆で激烈で成功的に貫徹された武闘は、武闘の精神的かつ技術的要素の典型を示すことによつて、インパクトを与えるであろう。しかし、核心はそこにはない。何のための武装闘争か、誰に、何にどのような打撃を加え、どのような解体をもたらし、味方にとつては何をかくとくするためにやるのか、味方が絶対に何を失しなつてはならず、そのための保証はないか、これらの現実立脚した具体的規定性が核心である。このかぎり、われわれはどんな犠牲を實際に払おうとも、階級闘争の全領域―全戦線の至るところで武装闘争をやつてよいし、やりうるし、やらなければならない。

一言でいえば、**革命的政治局線の正当性に結合しているかどうかである。**とりわけ、いま、日帝のどこと誰に攻撃を集中するか、どのように日帝と権力の困難状況をもたらずか、人民と党的要素の結合を拡大、高度化するか、党形成そのものを前進させうるから規定しなければならない。

われわれの想像を絶する苦闘を勝ちぬいてきたアジア人民が、急速に米帝を苦境においこみ、日帝を一致して射程に収めてい、日帝現政府危機が対外的に激成され、国内的に潜在しているとき、われわれは日帝路線の破産のはじまりを闘いとることができ、永続的な政府打倒のはじまりを闘いとることができる。

三里塚・沖繩・敦賀・入管のみならず、日中・日台問題こそ攻撃の中心にすえ、佐藤政府打倒の方向を明瞭に提起し、人民を大胆にたちあがらせることが、現在の眼目である。人民をこれにしっかりと組織すればするほど、佐藤政府の強権性に対する革命的暴力は、人民の闘争目的の完遂のために是認されるばかりでなく、自ら積極的に革命的暴力を武装闘争として推進する巨大な成長を闘いとるであろう。

際際している局面は、世界革命闘争の新天地であり、日本の「戦後」の根底的激動を伴つた大再編である。政府は深刻な動揺をおさえきれず防禦に狂奔している、反政府諸党諸派も転換を叫び「急進化」している、商業新聞は政局の極度の緊張、国会の激突、政府の重大困難、予想しえない大転換を公然としゃべっている。彼らは実際にどうなるのか、自分たちの安住し活動を保証された世界―日本の秩序自体の破壊に恐怖している。彼らを実際の恐怖のどん底にたたきこみ、この大再編の主動者として世界人民を結合した日本プロレタリア人民を登場させよ！ そのために革命的左翼は明瞭なスローガンを示せ！ この方向のもとに、ありとあらゆる創意をもつて、路線を破産させ、佐藤政府を打倒し、佐藤政府の統合力のもとでの警察政治

を粉砕するべく、大衆闘争・武装闘争を貫徹せよ！ 人民の明瞭な闘争進路への結束のもとで、武装闘争は人民の昂揚を促進し、昂揚に守られて、非合法化攻撃をのりこえて進めるのだ。われわれは、いくらでも組織破防法攻撃をかましうる冷静さ、緻密さ、そのような革命闘争の技術をもって武装闘争をやりぬくことができるし、必らずそうしなければならぬ。しかしそれ以上に、組織破防法攻撃の現実的貫徹条件及びその主体自体を瓦壊と混乱にたたきこむような、人民の昂揚と武装闘争による階級関係の質量的再編こそ目指すべきである。

フレーム・アップと挑発は摘発されねばならず、それに連なり運動全体の損害になる妄動的「武闘」は解体されねばならない。革命的暴力の陥落の表現——権力にたいする敗北に規定された政治の狭さでの混乱である暴力的党派闘争主義——内ゲバ主義は「掃されねばならない。

われわれは、この人民の昂揚、人民の武装闘争で大きな「犠牲」をこうむるのである。だが組織破防法攻撃を絶対に許さぬだけでなく逆に敵の混乱をもたらし、革命の指導の中心が確保されるかぎり、何を恐れることがあるだろうか。

日帝侵略と皮革命の最初の破産を闘いとれ！ 佐藤政府を倒せ！ この当面の闘いの勝利的貫徹の中に、人民は大きく革命的に成長、前進する。

人民の巨大な前進に依拠して、蜂起を闘いとる党を組織せよ！

¥ 150